
僕は使用人♪～8人の少女編～

アサゴロモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は使用人♪♪8人の少女編♪

【Nコード】

N0029B

【作者名】

アサゴロモ

【あらすじ】

使用人の仕事をするべく人間界に降りてきたユウ。しかし、彼のご主人は女の子8人だった……！

第1話〜今日から使用人〜

「あああゝあああああ!!!」

落ちた。 誰が？

「死いぬうううっうの!!!」

オイオイ、ヤバイんじゃないね？ 誰だよ？ この高さから落ちたらマジで死ぬぞ？ 誰か助けてやれよ。

「たあすうけえてええ!!!」

だあから 誰だよ!? 落ちてんの!?

は?…俺?

……………俺ええええ!?! 「あああああ!!!」

はい、どうも皆さんこんにちは。

僕はユウ・ハウスワークです。

ハウスワーク：メツチャ変な名前ですよ。ちなみに僕の職業は使用人です。名前の通り、家事や世話をしています。誰の世話? って思ってるでしょうが、それはまた後で。 つか僕は人間とは違う種族で、生きてる世界も違います。僕達は使用人の世界に住んでいて、大人になったら使用人として人間界に暮らします。

ぶっちゃけ使用人がどうしたんだよコンチキショウと思い、親に反抗してました。（口調は今と違ってもっとキツかったんですけどね。自分のことを

「僕」

じゃなくて

「俺」

と言っていましたもん）が……………その反抗のせいで僕は一足早く人間界に降りてしまったのです。その一部始終をどうぞ。

僕

「親父い！！！！俺は使用人としての人生を歩みたくなえ！！！！」

母

「ふざけんじゃねええクソガキがあああ！！！！」

グシヤアアア（何かが潰れた音） 僕

「ゲフウ！！！！」

母

「もういっぺん言ってみろや 単細胞生物があ」

僕

「え？ええ？俺、親父に言ったんだけど…ええ？なんでお袋が殴るんだよ！？」

母

「ユウちゃん…あたしゃそんな子に育てた覚えはないよ？？」

僕

「育てられた覚えもありません」

グシヤアアア（何かが潰れた音） 僕

「すんません 俺はあなたの股から産まれた時から使用人としての人生を歩みました。いや、マジですいません」

母

「最近よお、お前、生意気じゃね？だからよおママは考えたのさ」

僕

「……何を？」

母

「お前、人間界に堕ちろ」

僕

「は？」

母

「だあかあらあ！堕ちろって言うてるんだよクソガキがああああ！！！！」

「サンタクロースじゃないでしょうか？」

「違いますよう!! チカンです! サンタクロースがこんな壁をぶち破るへましません!!」

ちよつと待て……チカン？蒸し熱い？

ま、まさか、まさか……ココは……

「風呂場あああ!?!…ってアレ?」

俺は気付く。今の状態がどれだけヤバイのか。

$$\vdots$$

ヤバイ状況その1：俺は何かに乗っている。

ヤバイ状況その2： その何かというのは女の子である。俺はその子を押し倒している状態だ。

ヤバイ状況その3： 女の子は裸だ。なにせココは風呂場なんだから。

ヤバイ状況その4…俺の両手は女の子の胸をしっかりと握っている。

「……魔女の宅急便です。ハンコ下さい」

コレ、一応フォローなのね。

「イイイイヤアアアアア！！！！！！！！！！」

ドガ
アアアアアアアアアア
！！！！！！

殴られた。俺によって破壊された天井のガラクタを凶器にして。ただいま数秒間、未知なる世界へ観光中。

「誰！？誰コイツ！？あたしの胸を……あたしの……うつ、うつ」

「は！？ お、俺はオメーみたいになっちええ胸触ってもなんも嬉しくねえから気にすることね…ゲブラハア！！！！」

「死ね死ね死ね死ね！ 変態！ 痴漢！ ウ○コ！」

ちよつと

百歩譲って変態痴漢は良いとしよう……だが女の子がウ○コ
だ……やめろや……

「どうしたのです？ 騒がしいじゃないですか」

騷音（罵声）のなか、透き通った大人の女性のこえが響く。ここ

にいる全員が声がした方、風呂場入り口に目を向けた。

「梅子だあ」

小さな赤い髪をした女の子が女性を指差す。

ついでに彼女は裸だ。まあ風呂場だからねにしても、メチャクチャ綺麗な体をしてい……あ、ヤベツ…変態じゃん。

「夫人も風呂に入んのかよ？狭いじゃねえか」

ショートカットの女の子が文句を言うが、この風呂場に広いも狭いも無い気がする。なにせこの風呂場は、普通の温泉の2倍あるからだ。

女9人には十分過ぎる広さである。

「梅子夫人！なんか変態さんが来てます！！！」

と、メガネ少女……。風呂場くらいメガネ外せや…。くもって何も見えてねえじゃん。

「宇宙生命体の解剖…」

オイ、なんか意味深なこといいだしたぞ…この不思議少女。大丈夫か？

「ちよつと梅子さん！！変なヤツが………」

「ウチらの裸見にきたんやで！！よっしゃ！！警察に連絡やあ！！！」

「ふえっ！？ココお風呂場ですから電話無いですう！！」

慌てるメガネ少女……。メガネがくもっているせいで、関西女とは正反対の方向に話しかけている。

……大丈夫か？

「まあまあ、話は後から。お風呂あがってからにしましょう」

と、一番話が分かりそうなお嬢様系の少女。

俺はどうなるんでしょう？

「さて、皆さん。この子は貴女方のお世話をすることになった……」
「ユウ・ハウスワークです………」

メチャクチャ冷たい視線が俺を突き刺す。なんつうか………憐れみの目？

俺達は今、食堂にいる。ぶっちゃけメツチャ広い。なんかたかそうな絵画もあるし、変な鎧もある。……普通じゃないと思う………。つうか鎧なんて普通ねえよ！

「それでなんですか？ 私達と暮らせていうんですか？ 絶対嫌！！」
貧乳娘・同居反対一票

「嫌だ」

ショートカット娘・反対

「変態はイヤヤ」

関西娘・反対

「宇宙生命体じゃないなら要らない」

不思議少女・反対

「私も……反対？」

メガネ少女・反対

「絶対嫌でっす！！体腐ちやいますもおん」

赤髪少女・反対

「無理！アタシは反対っ！！！！」

初めて会った時大声でさけんだ少女・反対

「皆さんがダメなら私もノーで」

お嬢様系少女・反対

あれ？

全員反対なんじゃねえかよおお！！！！

どうなるのさ？俺の人生！？

第1話〜今日から使用人〜（後書き）

応援してくださったり、評価してくださったりした場合、アサゴロ
そのIQが2上がります

第2話く下着ドロボウはまだこないく(前書き)

次の話で幕開け

第2話く下着ドロボウはまだこないく

……使用人どころじゃねーよ………全員俺を否定か!?

「まあまあ、この方は私達の使用人になりますのよ?」

その言葉を聞いた瞬間、少女達の目の色が変化した。 「夫人

?それって、洗濯・掃除・食事準備全部まかせていいの?」

貧乳娘は嬉しさを隠しきれないようで、肩が震えている。

「それだったら、この変態

糞ガキを同居させていいわ」

「分かりましたわ。皆さんよろしいですわね?」

ちらほらと

「賛成く」

やら

「雑務よろしくく」

やら

「死ねく」

やら声が飛んでくる。

オイ、誰だ?死ねって言ったヤツ

「はいはい!!」

赤髪少女は手を大きくあげた

「使用人とボク達女性9人ってなんかエロくないでっすかあ!?」

「エロスやあああああ」

「AVとかにありそお!!」

「って事でボクらの言う事絶対守ってもらいましょお!」

「主従関係やあああああ」

「SMだあああ!!」

関西娘とキャアアとか始めに言っていた少女………この二人大丈夫か?

「そしてマイ・下僕ユウ君!!」

「…はうっ!？」

「常にボク達に敬語を使うコト!!そして自分の事を『俺』じゃなくて『僕』と言う事!!」

「『決定えええ!!!!!!』」

「……………つう事で

俺改め僕、今日から使用人になります……………(溜め息

カンカンカンカン!!

ばかデカイ屋敷から金属を叩く音が響く……

「あゝさゝでゝすうゝ!!!!」

三階の僕のご主人様達が寝ている部屋の前を、鍋を鳴らしながら僕は歩く。

「ミカンちゃあん!また遅刻ですよお？」

「うっさいでっす!!!!今夢イイトコなんでっす!!!学校はユウがいつてくださいつ!!!」

あの糞赤髪少女…ミカンは最近調子に乗ってる…

「藍さあん!!!!朝ですよ!？」

「メっメガネが無いですう!!!あっ!きゃあ!」

ベットから何か転がる音。メガネ少女・藍は相変わらずアホだ
「来さん!!!朝です!朝練遅れますよ」

「うっせえ死ね」

「……………」

ショートカット娘・来^{ライ}はムカツクほど怖くて、口が悪いカンカンカンカン

再び鍋を鳴らしながら歩く

「伽凜さん、朝です」

「関西人の朝は遅いんじゃないボケ」

関西娘・伽^{カリ}凜は朝だけ機嫌が悪い…いつも変なテンションのくせに

「流音ちゃん、昨日の天体観測のまとめしないんですかあ??」

「宇宙生命体…かまぼこ…」

不思議少女・流音^{ルネ}は、また不思議な言葉を残した

「風花さん！今日は友達と待ち合わせしてるんでしょ？急いで下さい」

「アタシ眠いのお!!! 一生寝てたい」

昨日、カレンと騒いでいたエロ娘・風花…。そのまま一生の深い眠りについて欲しい……。 「ミルクさあん!!! 朝

です!!!!!!」

「なんであたしがアンタの言う事を聞かなきゃあ…むにやむにや」
貧乳娘・ミルクは寝てしまった駄目だこりや

僕がここに来て3ヶ月。

仕事…雑用は全て覚えたり、ばかデカイ屋敷もだいたいどんな部屋があるか分かってきた。

一部を抜いて……。

ご主人様達は梅子

夫人の屋敷を借りて学校へ行く。

簡単に言えば寮である。

流音ちゃんは小学4年生。

ミカンちゃんは中学2年生。

藍さんと来さん、カリンさん、貧乳娘は高校2年。風花さんは高校3年。そして桜子さん（お嬢様系のまともなヒトだ）は大学3年だ。

梅子夫人は昔に夫と離婚し、この自分の屋敷に住ん

でいるそうだ。 なんていうか、疲れる。このワガママ

娘達になぜ僕は体力を消費しなければならないのだろう。

朝はご主人様を起こし、流音ちゃんの天体観測の手伝い（流音ちゃんは小学生だから昼、代わりに僕がやる）。

昼は庭の手入れ、梅子夫人のドレスのクリーニング、天体観測、夜はミルクさんの宿題の手伝い、そして天体観測……………アホくさ

まあそんなワケで僕は頑張っている

「あら、まだ皆さん起きてらしてないの？」

桜子さんだ……この人はさすが大学生だ。一番僕の助けになってくれる。

「もう8時になるんですけどね……遅刻しなければいいのですが……」

「「「「8時いい!?」」」」」

各部屋から声がする。当然だ。だいたい僕は6時30分から彼女らを起こしている。みんな部屋から飛び出

して、朝食をとるために下の食堂へ走りだした……「なんで起こしてくれないんでっすか!？」

僕は全力を尽して貴女を起こしました

「メガネえっ」

まだ探してるんですか!? マジで大丈夫か目え!?

「朝練間に合わねよ!……!」

当然だ……

「なんでちゃんと起こさんかったあ!？」

朝は苦手と聞いたので素直に貴女に従いました。

「かまぼこおお!……!」

勝手に言ってる。

「目覚まし何で鳴らないのお!? 友達に怒られるう!! ユウ!! アンタのせいだよ!？」

いや、僕のせいじゃない。起きなかったアンタのせいだと思う。

「遅刻ううう!……!……!」

………ホント、駄目だありゃ……



「はいはい、伽凜さん、醤油そこです。へ? 無い? 自分で補給してください……。駄目ですよミルクさん!! 朝ご飯食べないと!! は? マズイ? 嫌でも腹に突っ込んでください……ってミカンちゃん!! 何牛乳こぼしてんの!! あくもう!! 絨毯濡れちゃったじゃん……

いや、笑い事じゃないから。笑うくらいなら手伝って下さいよ風花さん！ちよっと！！！玉子焼きこげてるって！！！流音ちゃん！！フライパン見てって言ったでしょ！？え？まだメガネない！？もう今日は水中メガネかけたらどうです！？」

「……………やっぱりユウさんが来てから賑やかになりましたわ」

……………賑やかな度合いを充分に超えていると思う。

梅子夫人は爽やかな笑顔でハムを口にする。

ただの190円のハムなのに、夫人が食べると高級な肉に見えてくる。

「ユウ君もちゃんと仕事してますし：梅子さんは安心して海外へ旅行に行けますね」

こう言ったのは桜子さん。二人そろりとまるで人形のような。なんつうか、あの馬鹿娘たちとオーラが違う。桜子さん達がピンク色だとしたら、あの人たちは黄土色だ。なんか生ごみが腐った感じのオーラによく似ている。 「……………なん

でこの家はこんなに騒がしいんですか？」

完全に力が抜けた…。疲れた。なんで僕はこんなに精神的な重労働をしなければならないのだ…？

嗚呼、父よ母よ……………可愛い息子を見えますか？

……………見てるワケが無い…：だいたい親が人間界に堕ちろつつたのに、今だ連絡無しだ…。

僕のワガママご主人様プラス桜子さん達はテーブルをこれでもかというほど汚し、学校へ向かった。

「それでは食器洗い宜しくお願いしますわ。私は明日の海外旅行の準備をしますので…」

「片付けが終わりましたら、僕がお手伝いいたしましょうか??」

梅子夫人は大人の笑顔を僕に見せる

「いいえ、結構。下着見たいのなら構いませんが…」

僕は想像してしまった…：梅子夫人と準備する姿を…『ユウさん、

そのモノを鞆に入れて下さいませんか？』

僕が見たのは、もはや隠す意味がないような、黒いショーツ……レースとかついているし……こんな僕が女の子だったら着れない……ぶしゅっ！！（何かが飛び出た……多分、鼻血……）

「すみません……遠慮します」

鼻血を止めようと鼻を押さえるが無謀だ……指の隙間から血が、馬鹿みたいに出ている。

僕って分かりやすいな。

梅子夫人は自室へ戻り、旅行の準備中。そして僕は食器洗い――

――……。

待てよ………。

第2話く下着ドロボウはまだこないく(後書き)

・アサゴロモ「こんにちはくこの度は僕は使用…」

・アサゴロモA「この度は僕は使用人♪く8人の少女編くを読んで頂き、ありがとうございます」

・アサゴロモ「…誰？何僕のセリフ取ってんの？」

・アサゴロモB「取ってんのはお前だろ？違うか？」

・アサゴロモ「…僕って三ツ子だっけ？」

・アサゴロモC「それより話進めよーぜ」

・アサゴロモ「あんたら何？」

・アサゴロモA「後書きによる後書きのための後書きを作る為に生まれたんだよ」

・アサゴロモ「…まさか他の作品の後書きも出るの？」

・アサゴロモABC「もちろんさ！」

後書き第1話完

第3話く下着ドロボウはあと少しく（前書き）

評価してくだされば、アサゴロモは嬉し泣きをします

第3話く下着ドロボウはあと少しく

食器洗いもいいが、僕は今日、ご主人様達の部屋掃除をしなければならぬ。確か前に掃除をした時は一人の部屋だけで一日かかった……。

僕は梅子さんのエプロンを借りて、いざ出陣……。

ってゆうかさあ、なんで男なのにヒラッヒラのエプロン着なくちやなんないのさ？メイドか？メイド萌えか？そんな馬鹿げたツツコミをしながら二階へ上がり、全神経に集中する。 ミッ ションくミカンちゃんの部屋でヤツを倒せく

僕は深呼吸をし、ミカンちゃんの部屋に入る………が………。

ワサワサツ……何か動いてる………まさか
ッ！ヤツか！？ヤツなのか！？

「あああああああ……！！！！」

いた！ヤツが！！いたよ！ベットの下からワサワサ動いてる………！

「ゴツゴツゴ！！！！ゴゴゴゴゴキブリイイイイ！！！！！！！！」

「」

そう、ヤツの招正体はゴキブリなのだ！！しかもゴキブリの数は20匹。なんで？なんでこんなにいるの？

大粒の涙を流しながら、僕は無我夢中で、床に落ちていた本を丸めて武器にする。

「うおおあああああ！！！」

ブンブン振り回し、ゴキブリが窓から逃げていく。 ブ

ーン……ぴとッ ヤツが、僕の顔に、とまった

……

「うつ、うつ……うあああああ……！！！！」

もう大粒どころじゃない。滝のようにジャバジャバと涙が流れる。
「死ぬー！死ぬー！」

僕は顔を気持ち悪いくらいブンブン横にふり、ゴキブリを追い返す……………ゴキブリはこれでいなくなつた……………僕の勇士もすばらしいモノだったよ。涙で顔グチャグチャだけど。

「……………あれ？」

そういえば、僕の武器にしている本って……………？

丸めた本を元に戻すと、タイトルはこんなんであった。

『まにあつくSM（オトコの飼育のし・か・た）』

「……………」

言葉もでない。

ミカンちゃん中学生でしょ？なんで、こんなあるのさ？まさか趣味はアチラの方？

しかも、ペラペラページをめくると、縄で縛られた男の人や、口ウソクを持った女の人があった。

あれ？……………ちょっと待て。なんで……………なんで……………僕の写

真が貼ってあんの！？

これは確か数週間前に、僕はヒラヒラエプロンを初めて着て、恥ずかしがっていた時の写真だ……………写真は、上手く顔だけ切り取っていて、しかも我ながら、いやらしい表情だ……………。

しかも、男の人が縄で縛られている写真だから、恥ずかしいのなんのって……………

あのクソ赤髪少女がああ！そんな愚痴をこぼしながら、風花さんの部屋へ……………わりと綺麗な部屋だが、床にはミカンちゃんと同じく、本が落ちていた。

『女主人と使用人の禁断SM（僕をペットにして下さい）』

「……………何？嫌がらせ？」

こんな大人が隠すような本、どうしてこんなにあるのだろう？

この本もペラペラめくると、僕の写真がミカンちゃんの本と同じように貼ってある。

しかもさっきのより過激だ!!

言っておくが、僕は決してMじゃない

あいつらがサドなだけだ…。

最後に貧乳娘もといミルクの部屋を掃除——………なんでだろう？どうして部屋のドアを開けた瞬間、ゴミ屋敷なのだろうか？

しかも衣類だけが散らかっている。

下着とか……下着とか……下着とか……。っていうか、下着しか転がっていない。

何？だらしないっていうか、貧乳娘の下着なんか見たって、興奮なんかしねえよ。むしろ、目の毒だ。

ゴム手袋をはめて、適当にぱんつを一枚とりあげる。

どうせ肌色ぱんつとか、キャラものぱんつだろ？………と思ったのだが…！

「ち、違う!!これは——!」

男どもが大好きな——

「ヒモパン!!!!」

梅子さんのぱんつとは違い、若い感じのぱんつ。白いレースが付いていて、スケスケのピンクの可愛いヤツだ。

しかもブラジャーもレースが付いていて、めっちゃ華やかなブラジャーである。たぶんコレを身に付けたら、男どもはノックダウンだろう。

その他にも、Tバックやらヒラヒラブラジャーやらでてきた。

「……………ふう…やっとなんた全部終わったあ。ってゆうか、ミルクさんヒモパンなんだ……。」

しりたくもない事実を知り、今日の昼仕事は終了!　なんだか頭がふわふわする。太陽の光が僕を照らし、優しい風が僕の髪を揺らす。外から鳥の鳴き声が聞こえて、僕が手入れた庭から花の甘い香りが届く。

「ふわあゝあ」

デッカイあくびをした瞬間、僕の意識は切れた…。 毎日の下
僕生活に疲れているのだろう。
たまには休みも必要だよな？

夢をみたが、

とても変だった…。

なんか、ミカンちゃんやカリンさん、風花さんに鞭で叩かれる夢
だ。

「オーホッホ！私の世話をしつかりやるのよ？ユウ」
ミカンちゃんがミカンちゃんじゃない…。誰だよ？ 「ウチに苦
しがるカワエエ顔見せえ」

ビシッバシッ

うおっ！！！！こいつらなんだ？ってゆうか痛い！！痛いよコレ！
！？

「ウチらのボス、風花が今来るでえ」

「オーホッホ！泣きなさい！？わめきなさい！？」

ちよ、あぶな…！！危ないっ…鞭！鞭危ないよっ……うおっ！ぎゃ

ああああああ！！当たった！！^{すね}脛に当たったよ！！！！

「ふえッ…！？」

ちゃん ちゃんちゃんちゃん ちゃんちゃんちゃん

どこからかBGMが聞こえる……しかも有名なケータイホラー
だ……。

怖ッ！！！！怖いよ！！

だが僕は、この次に起こる恐怖をまだしらなかった

「ユーウーちゃあーん」

う、後ろから風花さんの声が…。

振り向いてはいけないと分かっても、体が思うように動かず、
勝手に風花さんの方へ体が向く…。

そこには恐ろしいモノが立っていた。

「ユーーちやあーん」

「うぎやあああああー!!」

「ユーーちやあーん」

「ゴッゴッゴッゴキッゴキッゴ?ゴキッ!ゴキブリだあああああ
ああああ!!んぎやあああ!」

風花さんが…ゴキブリになっている……!!!!

もう、助けて………

第3話く下着ドロボウはあと少しく（後書き）

・アサゴロモB「こんにちはあアサゴロモです♪後書き第2弾!!」
・アサゴロモ「なんで役をとるのかなあ?！」

・アサゴロモA「いいじゃん。俺達一心同体だろ!？」

・アサゴロモC「おいアサゴロモ!! テメエ早く後書き進めろ!!」
・アサゴロモ「……なんだよ! 偉そうに!!」

・アサゴロモA「早くしろってえ」

アサゴロモ「はい。すいません。さて! 第3話になりました!! 下着ドロボウがどんどん近付いてきます!!」

・アサ

ゴロモB「アサゴロモさぁお前、とっととパソコン買えよ遅いんだよ更新がよ」
・アサゴロモ「だってさぁうってゆうか! 話脱線させんなよ。……ここまで読んでくれてアリガトウ!」

第4話 下着ドロボウはここにいた(前書き)

下着ドロボウ編まだまだ続きます♪評価してくださると、更新速度がアップすると思います！ B V読者の声が大好きなアサゴロモ

第4話 下着ドロボウはここにいた

「はうつつっ！……！！！」

ガバツと体を起こす…が手足が動かない…。

と

りあえず最悪な夢だった。なんだよ？SMプレイって！

ってゆうか変だ。

僕はミルクさんの部屋で寝ていたはずだ。

なのにどうして、屋敷のホールにいるんだ？

窓を見ると、すでに

太陽は沈んだらしく、月が見える。

あ、流音ちゃんの天

体観測忘れてた。そういえば、もう梅子さんは旅行にいつちゃったのかな？

頭がまだ寝起きのせいでボケて

る。

ビッシャアアアアア！……！！

「おえあああああああ！！冷てえええええ！！」

いきなり水をかけられた。しかも氷入り…。半分白目だった目を黒に戻すと、僕の8人のご主人様が僕を見下ろしていた。

「あ、あれ？どうしたんですか？」

よく見れば、僕の手足に縄が縛られていた……。

まさか、

正夢！？

「どうしたとかじゃねえよユウちゃん」

ヤンキー座りのミカンちゃん。どうみても、トイレの体制にしか見えない。

「いつかはやると思ったけどなあ。ユウ、これ一応犯罪やで？」

「は、犯罪！？僕ナニしました！？」

「ユ、ユウさん……！私、そんな最低な人だとは思っていませんでした……！」

「泣いたらアカン……！藍！耐えるんや……！この現実……！」

「うつ…うつ…ふええん！」

ドコの昼ドラだ？

「やっぱり男は獣ですね」

「なっ…！桜子さんまで…！！いったい僕何したんですかつ…！！」

「しらばっくれてんじゃねえよ」

ライさんもそうとうのご立腹だ。

「…ミルクの部屋で、なんでお昼ね？やましいコト、考えてた？
ユウ、要求不満？いやらしい。かまぼこも、許さない」

「流音ちゃん！なんなんだよ…！」

「ユウ、あんたアタシのぽんつ盗んだでしょ…！」

「はあっ…！」

……下着、盗んだ？僕が？

「盗んでませんよ…！！大体なんで僕が貧乳娘のツ……ぐえッ」
おもいつきり殴られた…

「ま、あとはこのS女王こと、風花にまかせなさい？」

「女王…！」

「おでましやあ…！」

風花さんの服装は網タイツと、必要最低限のトコしか隠してない服を来ている。ついでに鞭も持っていた。

「あああああああ…！！夢と同じだあああ…！！」

バッチんと鞭で床を叩く。嫌だ。死にたくない。ってか、この人に身を委ねたら僕の羞恥心とか尊厳とか消される…！

「いいいいいいやああああああだあああああ…！！」
「！」

僕はうさぎのように、ピョンピョン跳んで逃げた。我ながらマヌケな姿だと思う。

「待つでっす…！！下着ドロボウ…！！」

「あかん…！！ウチらのパンツも盗むつもりや…！！」

「やめてください…！！私の部屋にはぞうさんパンツがああ…！」

「私の部屋にはヒモパンよ。ちよつと過激パンツだから、ユウさんには見させませんわ」

「オレの部屋には毛糸パンツが……」

「ライ、そんなパンツ、はいてたの？ かまぼこも、ビックリ」

「ユウを捕まえなきゃあ！！ アタシの勝負パンツウ！！！」

「Sの血があ！ Sの血が騒ぐ！ ユウを滅茶苦茶にしてやりたい……ん」

「ぎゃああああああ！！！」

次々と追ってくる僕のご主人様。怖い。メツチャ怖いよお。

とりあえず僕は、三階に逃げた。この屋敷は、はじめも言ったが、マジで広い。だからそう簡単に見付かるはずはないっ！！

赤いカーテンがかかっている部屋に逃げると、どこからか、怪しげな声が聞こえる。

「ぱーんつうパンツー女子校生のパンツー気持ちいなあ……」
ぞわわあ……

鳥肌がたつ。なんだ？ この歌は……！？

年齢は分らないが、確実に男の声だ……！

まさかつ！ コイツが憎き下着ドロボウかあああ……！？

第4話 下着ドロボウはここにいた（後書き）

アサゴロモ 「読者の声が唯一の栄養となっているアサゴロモです」

アサゴロモB 「そうそう

！ついに500人突破っすよ！！」

アサゴロモA 「まさかアサゴロモも500人いくとは思ってなかったヨウダネ」

アサゴロモC 「初心者だけど、ア

サゴロモは頑張ってるんだよ」 アサゴロモ 「読者大好き！！読者が僕を強くする！ホントに読んでくれた人、ありがとう！！！」

第5話く下着ドロボウが逃げた（前編）く（前書き）

応援メッセージと評価が大好きなアサゴロモですくメッセージ等見ると、アサゴロモは気力が上がります→→

第5話く下着ドロボウが逃げた(前編)

「ぱーんつうくボクの大好きパンツうく生暖かいトコが最高く!」

イツ、歌いだしたぞ…?

なんだ? ついにはコ
僕はドキマギしながら、

部屋の電気をつけた…!

パチっ……

「ウヒョッ!」

男は突然の灯りで、手で目を覆う。

とゆうか、僕は今の状況に困っている……。

なんつうか…。この男の格好は…。おかしい。

下半身は女性用パンツだけで、筋肉質な毛だらけの足が丸見えだ。
上半身はもちろん裸…。胸毛が鳥の巣みたいになっている…。そ
して頭はパンダの仮面をかぶっていた。

一言でいうと、変態だ。つうか、ぱんつの歌を歌っているトコで、
すでに変態である。
ついで

にパンダ仮面の後ろには大量のパンツ……。

「あのくその大量のパンツ一体く……。」

「あ、コレ? ボクが盗んできたのだ!! ボウヤもどう? 気持ち良い
よ」

ぞわわわく

変態だっ! コイツは生粋の変態だ!!

ドタドタドタくと、うるさい足音が聞こえてきた。ご主人様達が、
僕に罵声を飛ばしながらやって来る…

「ウヒョッ! 女子校生がやって来るねくウヒョッ! コーフィンするな
あく」

パンダはパンツを一枚とり、匂いをかいだ……

「ミルクさあん!! こっちです!! こっちに変態があく!」

パンダは大声で叫ぶ僕を見て、ニヤリと笑う……

駄目だ…耐えらんない。　キモ過ぎるコイツ、キモ過ぎる…！
「ミルクちゃああん！君のパンチュ、温かくて気持ち良いよ！ボク、我慢できない！」

なんですって！ユウ！今からボコボコにするからあ…！！
とゆうミルクさんの声…　「ってゆうか、なんで声聞き違えるのさあ！？全然声違うだろお…！？？」

「ウヒョッ！君もパンチュ大好きだろお？」

「糞パンダ！！お前何してるのさッ！？ミルクさんに誤解されちゃっただろ…！！？」

ドタドタドタ

ミルクさん達がこっちに来る…！！

「ヤバイ時には全力で逃げる！」

「うわっ！」

僕を押し退けて、パンダは部屋を出てしまった。

くそ…あの糞パンダめ…！！

キヤアアアアア…！！

と、ミルクさんの叫び声が聞こえた。まさか…あの糞パンダに何かされたのか…！！？

僕は急いで、廊下にでる。「どうしましたッ！？」

「パンダが…パンダがアタシの胸を……！」

「………別にミルクさんの胸なんか減るもんじゃ…ゲフッ…！！」
殺気と共に殴られた…痛い……たぶん骨が曲がった…

「ミルク…！大丈夫でっすかあ…！？」

次々とご主人様達が出てきた。手にはノコギリやらハンマーやらバットやらを持っている。コイツらは人間兵器だよ…

「ってゆうかユウがおるやん…！！」

「オーホッホ！とうとう年貢の納め時ね…！！」

「ちよっ…！！待って下さい…！！下着ドロボウは…」

「下着ドロボウは、いけませーん…！！」

第6話く下着ドロボウが逃げた(中編)く(前書き)

アサゴロモは評価とともに成長していきますので、評価お願いします！
す！！
ではどうぞく

第6話 下着ドロボウが逃げた(中編)

禁断の部屋――……

それは、開かずの間とも呼ばれている。

あのご主人様たちだって入ったことがない。

梅子さんいわく、

『禁断の部屋？そうですわね〜とりあえず、大人のパラダイスみたいなトコロですわよ。年齢制限もうけようか迷いましたもの』
と、ゆう場所らしい。

「よし！！行くでっす！！禁断の部屋〜！」

「大人パラダイスゆうたら、ウチらの血が騒ぐわ〜！」

「パンダ仮面をい・じ・め・た・い〜」

そういつて、風花さんと同じような服装に着替えているミカンちゃん、伽凜さん………。

なんてゆうか……。

どうしてコイツらは……こんなに馬鹿なのだろう 「……とりあえず、行きましょうか……… (ため息)」

禁断の部屋は、三階の一番端にある。

鉄製の扉で、鎖と鍵が扉を守っていたのだが、パンダによって壊されてしまったようだ。

ついでに扉には、赤い文字で『R18』と掘られている……。

R18って……ヤバイだろオイ。

しかし、R18と掘られていても、馬鹿三人はハイテンションだ……。いっそのこと高血圧で倒れてほしい。

「大丈夫ですか？こんなところ、女の子が入って…」

「そーですよ！！桜子さんの言うとおり、危ないですよ！！」

「おい桜子、あの馬鹿もう行ったぞ…」

ライさんはもう、呆れかえっている…。

よくこの人たち馬鹿に囲まれて、平常をたもてるな。 部屋の中に入ると、馬鹿三人が、手をこちらにふっていた。

「暗くて、進みづらい。かまぼこライト、持ってくれば良かった」

流音ちゃんの言うとおり、電気がなくて、非常に暗い。

それに、ここは部屋とゆうか、広い廊下のようになっている。だから先に何があるのか分からない。

「ひゃあッ！」

僕の前を歩いていたミルクさんが、こちらを振り向く。

「ちよっとユウ！！アンタあたしのお尻触ったでしょ！？」

「は！？触りませんよ！どうして僕がミルクさんの汚…ゲフッ」

ミルクさんにまた殴られた…。僕は正論を言っているのに。

「きゃあッ」

「うわっ」

桜子さんとライさんの悲鳴も聞こえた。

「いきなり胸を…」

「オレも胸を触られた」

ちなみにこの二人は巨乳である。なんつうか、スイカでも入っているんですか？と聞きたくなるくらいデカイ。

「やっぱりユウなんでしょ！？」

「違いますってー！」

もうミルクさんがドコにいるのかすら分からない。 するといきなり電気がついた。

パチッ……………

「はれ？」

僕の目の前には…デッカイ鎧が立っていた…。

「うわあああああああ！」

ライさんと桜子さんの近くにもいる。

「何なのよ！？この鎧！…きゃッ！」

分かった……ミルクさんの汚いケツを触ったのは、このエロい鎧だったんだ… しかも鎧の数は10体。

鎧のくせに、器用にご主人様の胸を揉んでいる。

「ふえっ！…イヤッ！！…あんっ」

ヤバイヤバイ！！もう小さな子達には見られないよ！！ 鎧はどうやら女好きらしく、僕を襲わずにご主人様たちだけ押し倒…じゃない、襲っている。

「きゃあああ！！ユ、ユウ」

「え！？あっ！！ミルクさん！！ちよっ、マジでR18ですよ！！」

助けを求めるミルクさんだったが、彼女はそれどころじゃない…

……

なんてゆうか……

彼女はスカートをはいている……

そこまでは別にどうでもいい…。

「……ミルクさん…下着、はいていないんですか？」

「へ？」

自分の服装をよくく見ると、スカートがめくれていた。

だが普通ならパンツが見えるハズである。

しかし自分はパンツとゆうモノをはいていない……

「ひっ…いっ…イヤアアアアアアアアア！！」

「続く」

第7話く下着ドロボウが逃げた（中編1／2）く（前書き）

評価がアサゴロモの栄養となっております…WW感想や評価をする
と、アサゴロモの笑顔の眩しさが上がります^^

第7話く下着ドロボウが逃げた(中編1/2)

下着をはいていないミルクさん……R18どころじゃない。僕には過激過ぎる

「ミルクさん!!汚いケツ隠して下さいッ!!」

「見てんじゃないわよおお!!」

ミルクさんの長い足が僕の顎を潰す。

「うぎゃあ!!」

だが見てしまった…。なんつうか…ベストアングル?

「だいたい下着ドロボウが、アタシのパンツ全部とったから着替えなかったのよ!」

す、凄い……何が凄いつて、そりゃあ…ミルクさんが足で鎧をバツタンガツタンと壊してるからさ…

僕も体験したが、ベストアングルを見れた鎧達は、笑顔(?)で壊されてゆく…　そ、そういえばアノ三人は…?

「きやはははは楽しいでっすう」

「ろうそくや!!ろうそくプレイするでっ!!にやはははは」

「(バッチイン)ホラ、何か言ってみなさいよ!(バッチイン)貴方私の犬になるのでしょ?(バッチイン)おーほっほ」

すんませ〜ん

なんですかコレは?

なんで鎧とSMごっこしてんのさ?

なんか知らないケド鎧さん泣いてるよ?

しゃっくりあげてるよ?　ちなみに(バッチイン)って音は、

風花さんの鞭の音だ。

鎧さんは、ろうそくまみれで縄で体を縛られている。憐れだ…憐れすぎる。　「風花、ミカン、伽凜、どいて」

「あれ?何ソレ流音ちゃん」

「かまぼこバツズーカ」

「へ？」

ちゅどおおおおおん （しばらくお待ち下さい）

パラパラ：がっしょん

「ふへえっ！！死ぬ！！マジ寿命縮まった！！」

瓦礫の中から出てきた僕。さっきはなんか、死神が見えた。しかもその死神は下着を持っていた……

「ケホッ！何があったの！？」

「ミルク、私の、かまぼこバツズーカ試した」

ここで試すなや：

「あれ？なんで桜子さんとライさん被害にあってないんですか？」
僕の目の前には桜子さんとライさんが、まるで何もなかったように立っている。

「ライさんがバットで無数の瓦礫を打ち返したのですよ」

か、神業だああああ！
照れくさそうにライさんは頭をかいている。

そういえばコノ人、女子野球部4番だった：

ライさんの手には瓦礫のせいでできたヘコミがあるバットが握られている。

「アキラくん消えたでっす！」

「ほんま！？あゝんアキラくんもつとイジメ：ちゃう、遊びたかったわゝ」

「あった！アキラくんが鉄屑にいゝ」

……風花さんが抱いているのは先程のろうそくまみれの鎧だった。どうやらアキラというらしい。

この三人は人間と鎧の区別もつかないのだろうか？

「：…そういえば藍さんは？」

シーン

……………。

.....。

「「「「「忘れてた!」」」」」
なんて奴らだ……僕も忘れてたけど

第8話く下着ドロボウが逃げた（後編）く（前書き）

コメントや評価をしてくださると、アサゴロモの視力が0.1上がります

第8話 下着ドロボウが逃げた(後編)

「藍さんドコに行ったのしょうかね」

「ちゅーかアツチに扉あるで？なんやろ？」

「え？」

僕らと瓦礫の向こうには、赤い扉がある。ここも誰かに壊されたようだ……つつつてもパンダしかないけど……。

「かまぼこバズーカで、破壊？」

「いや、やめて、流音ちゃん……ってオイイイイイ！！何構えてんの！？」

「発射よおい……撃て」

「撃てじゃないから！あっ！ぎゃあああああああ！」
ちゅどおおおおおおん（しばらくお待ち下さい）

「る、流音ちゃん……頼むからヤメテ……」

再び瓦礫に埋まる僕ら。 死ぬ……。自衛隊でも来て、僕を助けてくれないだろうか？

「うっぎゃあああ！！」

……なんだ？破壊された扉の向こうからオッサンの声がする。

「すみません！！すみません！！ぞうさんパンツなんて盗んでいませんからッ！！ぎゃああ！！それはダメっ！！ヤケドする！あっ！ちよつと！！うっぎゃああああ！藍さ……いえ、藍様！助けて下さい！すみません！すみま……」

……オッサン、ってかパンダの声は途絶えた……

彼女……藍さんは何してんだろうか？

「藍さああああん！！！！」

血相を変えて僕は、扉の向こうへ走って行った。「……………」
……何してるんですか？」

……そこには鬼の様な顔をしている藍さん……誰か除霊してほしい。
藍さんは釘バットと日本刀を持っていて、頭にはろうそくを三本

つけている。もうどうにかしてほしい　ついでにパンダは、頭にぞうさんパンツを被っている。

「オイ、てめえ…何私のパンツ盗んでるんだよ」

「盗んでいませんから!! すんません!」

「ああん!!?? んじゃあソノ汚ねえ頭にのっかってるパンツなんだよ!!?? 言ってみそ!!」

……………んだよ

「言ってみそ」

って

「藍さん!! 何やってるんですかつ!!」

「うっせえチビ黙ってろ」

ん、んなっ!!!!

確かに僕は背が低い。低
いさ。せつかく助けに来てあげたのに…何? チビよばわり? 何様よ?

「私のパンツ返せええ!!」　　バツコオオン!!

「ぎゃあああああ!!」

パンダの数ミリ近くに釘バットが飛んできた。

「何してるでっすか!!?」

「み、ミカンちゃん…藍さんがあ…」

「まかせるでっす! こうゆう藍は日常茶飯事でっす!!」

……………そうなの?

「うっひゃっひゃっひゃっ!! チキンじゃー! パンダがなんじゃあーい! うひょっうひょっ!!」

「いやー!! こんな藍見たことないでっす!」　「そうゆうときは、

かまぼこバズーカで、へっちゃら」

「は!?! またバズーカ!? ヤメテ! ストップ流音ちゃん!!」

すでに撃つ準備を整えた流音ちゃん…………

「パンツ、パパパンツは返します!! すんません!」

もうパンダは頭から血が流れるほど土下座をしている。

「あ、藍さん…………パンツ返してもらえるのですから、許してあげた

方が……」

「許さねえ〜！ひゃっひゃっ〜！私のパンツ〜！ぎやははは〜！」

……ダメだこりゃ……

ってかこのパンダ可哀想だな……下着ドロボウなのに逆にいじめられて……

「神野崎 藍流ザ・ぞうさん拳……！」

なんじゃそりゃ？

ちなみに藍さんの名字は神野崎である。

「私のパンツを汚す者は……消えなされえ〜！！」

コオ〜〜〜と

スーパーサイ○人みたいに、藍さんの髪はたち、オーラを放つ……

「空の果てまでなんとやら〜！！」 藍さんは邪念がつまった拳で

パンダをふつとばす。藍さんの数倍あるパンダの体が、窓を破って飛んでいく。

ってゆうか、なにその掛け声……？

「ボ、ボクは……ボクは女子校生のパンチュが欲しかったただけなんだ〜！！」

そんなアホくさい叫びとともに、今回の下着ドロボウの犯人は消えた……。

「ふにゅえ……」

パンダが消えた途端意識を失う藍さん……

「あ、藍さん……！！」

「ケホツケホツ……！パンダは！？変態パンダは！？」 瓦礫の中か

らようやく抜け出てきたミルクさんたち……

「パンダはスーパーサイ○人風の藍が倒したでっす！」

「あら、藍さん……大丈夫ですよ？」

「藍は俺が運んでくよ」

「桜子さん、ライさん……」

……や、優しい……！こんな馬鹿の集団のなかで天使がいたよ！

「パンダどこやあゝ!? ウチらが殺ってやるでゝ!」

「違う違う! 殺るんじゃないくて犯るよゝ! オーホッホ」

「下ネタ最高やゝ!」 もはやオマエらの存在が下ネタだ。

「パンダはもう藍がふつとぼしましたよ。藍さん疲れて気を失う…
ってか眠ってますよ」

ほんまかいなゝ? とかアキラくゝんとか騒いでいる馬鹿二人。

つうかアキラくんは関係ないと思う。

「ところで、盗まれたパンツ、どこ?」

「あゝ…そういえば…。ミルクさん、たしかパンツ無いんですよ!」
「?」

ワナワナと震えるミルクさん……

「あ、アタシのパンツうゝ!」

「ユウのパンツ借りたらどうでっすか!」

「結構です!!」

こうゆうとこだけ、僕とミルクさんは息がピッタリだ…。嬉しくは
無いけど…。 そーして、今日も長い一日が非常識に終わった

第9話くカレーとたくあんく（前書き）

評価などしてくだされば、アサゴロモは元気になります

第9話　カレーとたくあん

――…夢を見た

彼女の目の前には彼が笑顔で立っている。

たしかこの人は、自分にとって大切な人だった……

「ミルク…」

彼の優しい声。この声が彼女は好きだった。

「ミルク…ミルクってば……」

「なあに？」

ふと彼は懷から何かを取り出す。

「フリルとTバック、どっちがいい？」

彼の手にはフリルパンツとTバック……

違う……こんな彼じゃない……

「俺はミルクにTバックをはいて、――して○○○して、♪♪するプレイをしてもらいたいな」

………彼じゃない………彼は下ネタ………ってか――とか○○○つなきやいけない程エロい単語を出さない……

「ミルクちゅわあん…」

いきなり彼はパンダ仮面になる………

「い、いやあああああああ！！」

「ふえあっ！！！！って………夢？」

ガバリと起き上がるミルク………窓からは暖かい日射しがさしていた………

使用人だ。

僕はユウ・ハウスワーク。

毎日毎日ご主人様の世話をしている……。

だが……

「すみません……僕、風邪ひいちゃいました」

うつったよ……風邪。しかも風花さんから……。大変だよコレ。

「いやゝ大丈夫大丈夫！風邪なんてスグ治るよゝ」

治るよゝじゃねえよ……僕はアンタから風邪もらっちゃったんだよ
ってゆうか、この風邪はヒドイ……

鼻水だらだら、頭ぐらぐら、お腹きりきり、関節ぎしぎし……

ちなみに、鼻づまりに効くからといって、危うくネギを鼻穴に突
つ込まれるところだった……勘弁して下さい

「今日は仕方無いからみんなでカレーを作ろう！」

「あ、朝からカレーですか！？」

「ノンノン藍ちゃん♪カレーは朝に効くんでっすよ」

聞いたことねえよ。んな話し。

とにかく、今日僕は風邪のため、朝食を作れない。ってことで、
風花さんの独断で、朝からカレーになってしまった……

厨房には僕と、ミルクさん以外のご主人様がいる……

「どにがぐ、カレーのづくり方わがりますよね？」

「もちろんやて！！知らない奴は嫁にいけんわ！」 と、自信満々
の伽凧さん。アンタの自信は信用仕切れねえ。

「おはよ……何してんの？朝から……」

「あら、おはようございます、ミルクさん。今からカレー作りする
んですのよ。手伝ってくださいる？」

あくびをしながら手を洗うミルクさん。

さて、カレーを作りましょうか……ってか胃いもたれそう……

「まず、カレーの材料をもつでぎでぐださい……」

五分後……

「……………」

僕の目の前に様々な食材がならぶ……並んじゃっている……

「……………」

ご主人様も、『ちゃんと食材持ってこれました』みたいな事を訴えるような笑顔でいる……

「すいません、これ、なんですか？」

風花さん

「え？ いや、普通に人参じゃん」

「アンタ目え大丈夫ですか？ これ大根ですよ？ 煮物づくりですか？ 煮物つくっちゃうんですか？」

ミカンちゃん

「酸味と甘みをだすために、ミカン入れるでっす！！」 「……………
バー〇ンドカレーのCM見たことある？ 林檎でしょ？ バーモン〇カレーは林檎入れるでしょ？」

藍さん

「た、たくあんです！！ ふくじん漬けの代わりに、たくあんです！！」
「問題外……絶対カレーの匂いより、たくあんの臭いが勝っちゃうから……」

伽凜さん

「じゃが芋や〜〜！！」

「そのじゃが芋腐ってますよ」

「マジでか！？」

「マジです」

流音ちゃん

「カレー大革命……カマボコ……………」

「や、やめて！！ 練り物でカレーの革命起こさないで！！」

ライさん

「……………ネ、ネギ……………」

「和風勝負ですか？ それになぜ疑問形？」

桜子さん

「スパイスです」

「いえ、七味唐辛子です」

ミルクさん

「お肉……………」

「焼き肉用ですが…………？」

オイ、ちよつとまで、…………こいつら本気で材料持ってきてんのか？ 冗談でしょ？ ただ単に、僕でちよこつと遊んでいるんだよね？

「さあ〜カレー作るぞ〜！！」

と、風花さん

「「おう！」」

と、伽凜さんとミカンちゃん

ゴメン、前言撤回

この人ら、マジでした

第10話くやっぱり朝はカレーく（前書き）

感想をしてくだされば、アサゴロモは空を飛べます

第10話くやっぱ朝はカレーく

トントントン……ゴトゴトゴト……ザクッザクッザクッ……グツグツ……グチャ

「すいませえん、なんですか、さっきのグチャって音……」

「腐ったじゃが芋、踏んじった♪あはっ」

「あはっじゃないですよ風花さん!!! 床汚れちゃったじゃないですか!!!」

どうしよう……

今僕のご主人様は、カレーをつくっているのだが、もう最悪だ……もう兵器と化している……ってか『頼むがら、あなだ達がづくるのはやめでくだざい』

と言ったのだが、このありさまだ……

ついでに僕は風邪をひいている……しかももうどうでも良い……自分の生命の綱、食の安全がかかっているのだから……

「……風花さん……鰹節……いれようとしてます?」

「え? 鰹節、入れるんじゃないの?」

いれねーよ……どこの地域の文化だよ……インドと日本合体しちゃうよ

「あ、ちょっと流音ちゃん!! 鍋ちゃんと見て!! ってちょっとおとおお!! カマボコ入れたでしょ!!? いれたよね!」

「カレー大革命、阻止するなら、ユウ、消えてもらおう」

マフィアですか? カマボコマフィアなんですかアンタ……

「ニンジン切ったでっす!!!」

「だからソレ大根……ってあああああ!! なんて薄く切ってんの!?! 例えニンジンと大根間違えたとしても、ダメだよ!!!」

「キムチキムチくハヤシライス作るで」

「キムチとハヤシライス、カレーに関係ないですよ」

「アホか。カレーとハヤシライスは兄弟なんやで? キムチ入れた

ら兄弟なんやで？」

どこで、そんなアホ知識得たのだろう……

「きゃあっ！！」

「ど、どうかしましたか！？」

「め、めがねがーめがねが鍋の中にいー」

「……藍さん……いい加減ボケはやめませんか？」

「違いますようー」 鍋にはめがねが浮いたり沈んだりしている……

『きゃーあっついよくボク湯でめがねになっちゃようー除菌のつもりかよー高温除菌かよー』

とか、めがねが言ってるそうだ……

ドボドボドボ………

「……………」

ドボドボドボ………

「み、ミルクさん？ 鍋に、何入れているんですか？」

「ぎ、牛乳……」

やーめーてー！！！！

「シチュー出来ちゃうじゃないですかっ！！」 「ちよっ！ 牛乳入れたら、めっちゃカレーなめらかになるのよ！！」

「明らかにカレールーより牛乳多いじゃないですか！！」

なんで……？ なんでこの人たち今まで無事に生きてこられたの？ グスン……

「ま、カレーシチューってことで、朝飯にしねえか？」

「ハヤシライスも入れなアカン！！」

お前は黙ってろ

「ライさんの言う通りですわね。私達八人そろえば、まともな料理できませんもの。朝食、とりません？」

……………忘れてた……

今、朝食の準備だったんだ……

なんか一日ぶん働いた気がする……

「つてことで、いっただきまあああす!!!」

「カレーシチューハヤシライスDX食べるで〜!」

「なんかカレーの色ヤバイでっす〜!!!」

「……朝食が…出来た……つてゆうか、出来ちゃった?

出来るんだね、諦めなかったら

「なんか、こうしてみんなで作ると私達の団結力高まった気がしますよね」「そうよね〜たまには良いかもね。思ったより楽しかったし…」

「つてか、団結した結果がコレか……」

「ライ、それ、禁句」

「ところで、どうして誰もカレーシチューハヤシライスDXに手をつけないのですか?」

……………

「……風花さんもノリノリだったが、スプーンすら持っていない……………」

「……これ、犬の餌にしたほうが良いですよ……………」

なんかもう、カレーの色がウ○コ色になっている……しかも、材料は、たくあん、ネギ、大根、腐ったじゃが芋、七味唐辛子、牛乳、カマボコ、焼き肉用の肉、キムチ、そして藍さんのメガネである……誰も食いたくねえよお……むしろ拷問に等しいよ とにかく、遅刻の時間も迫ってるわけだし、食べよ?」

ミルクさんが話を持ち出すが、みんなもう魂が抜けてる……もちろん僕も…。 スゲェな……あんたスゴいよ、カレーシチューハヤシライスDX……

ちなみに、とうとう腹をわった僕らは、カレーをついにたべた……そのあとの記憶は覚えていない……………ゲフツ

番外編第1話〜白ユウ姫とラップ〜（前書き）

番外編です。本編とは全く別で楽しめます♪ぜひ読んでください！
評価お待ちしています！ちなみに今評価すると、アサゴロモのメー
ルをうつつスピードが上がります

番外編第1話〜白ユウ姫とラップ〜

僕の名前はユウ…じゃない、白ユウ姫である。

世界で一番美しいらしい……。

でも最近、生命の危機を感じている……。

なぜなら、僕の継母が僕の美しさを妬み、様々ないじめをしてくるからだ。

「ちよつとオ!! あんた最近チョづいてない?」

……何? チョづくって……死語じゃね?

「お、お母様! そんなことはありません……! 調子などのついていません!」

ちなみに、継母は風花さんそっくりだ……。 「あんたねえ! 前みたんだから! あんたがアタシの夫を口説こうとしたでしょ!」

「違います。口説かれました」

「キィィー! 腹立つわ!」

ハンカチを口にくわえ、それを手で引っ張っている ベタだなあ

……

ついでに一回殺されかけた……

それはある夏の日…あの継母はゴキブリキャッチャーを僕の部屋じゅうにしき、それに気付かなかった僕が、見事白ユウ姫キャッチャーになってしまったのだ……。 当然動けない。必死で足を動かしたが、意味がなかった。

ちなみにその状態が二日続いたのだ……。 継母いわく、ゴキブリキャッチャーで動けなくして、飢えさせようと考えてたらしい……。 だが僕を召し使いさんが助けてくれたおかげで、僕は餓死しなくてすんだ。

なんか、殺し方が地味ってゆうか、アホくさいってゆうか……。 そのほかに、殺されはしないが、いじめはある。僕が立って、

絵を鑑賞しているときに、膝カックンをしたり、僕の新品の消ゴムを最初に使い、角だけを減らしたり……ってゆうか、いじめが地味だよね……

もう精神的につかれる。 あのアホ

継母と暮らすのが……

「そういえば、新しいレコードを買ったんだっけ……聞いてみようかな」

継母とのやりとりを終え、自室に戻った僕は、机の上にあるレコードを手にとり、蓄音機にかけた。 てれてれてくれくれれれんゝ♪たたりたりん♪ 蓄音機から聞いたことのない楽器の演奏が聞こえてきた。

ってか、この曲買って正解だったのだろうか……

ボタンッ！！

「！？」

いきなりドアが開いた……「へいYO！！ラップの時間がやってきたZE！イエイ！あんたが世界一美しいと言われてるKEDO実はアタシがNO1！YO！チョづいてんじゃねーYO！マジでチョベリバなんですけどYO！！ラップラップ！アタシの命はサ○ラップ！Yearゝ！」

「…………お母様……なんですか？Yearゝ？」

「音楽鑑賞邪魔にしに来たぜYO！」

「なんでB系の服来て、チャラチャラしてんですかYOゝ？」

「ドレスじゃ似合わないと思ったんだYO！やっぱりB系だぜチェラッ！」

「…………帰って頂けます？」

「分かったYO！！邪魔して分かったYO！！頼むから、レコード投げないでくれYO！いや、マジすいませんでした」…………何がしたかったのだろう……継母は歌いながら帰って行った……。 ってゆうか何だよ、アタシの命はサラ○ラップって……。

しかもまた死語がでたよ……チョベリバだって……まだあの人は、厚底ブーツとかはいてんのかな？

蓄音機を止め、僕は深呼吸をする。

「散歩に行こう！！そうだ！そしたら、あのウゼえ継母もこないと思うし……！」

さっそく外に出るが、実は継母が一番高い場所にある隠し部屋で、僕をみていた……

「ふん。あのバカ娘め……パンダ！やっておしまい！」

そんなベタなセリフを吐きすて、パンダと呼ばれた人間？あ、パンダの仮面を被り、上半身裸、下半身女性用パンツを身に付けている変態は、ニヤリと笑う「アイアイサー……！」

パンダは白ユウ姫、ってゆうか僕を探しに隠し部屋を出ていった。もちろんこのことは、僕は知らない。

「うふふ。世界で一番美しいのは、アタシYO……」…………話のシメにYOはないだろ……

続く……？

第11話くじいさんと僕く（前書き）

毎度うるさいですが、マジで評価やコメントすると、アサゴロモは元気でますし、更新速度も体力アップしますよ♪あ、おたく嘘だと思った？ いやいや、嘘じゃないから。ホラ、ためしにやってみて下さいよ。アップするから……

第11話くじいさんと僕く

あの悪夢のカレーシチューハヤシライスDX事件から数分経過した。

「……………」

相変わらず、あいつら…じゃない、ご主人様たちはテーブルを汚して学校へ行ってしまった。

なんかもう、掃除をする気にもなれない。

カレーはベツトリとテーブルについているし、椅子には何故かたくあんが拡散していた…：ちよつとまで、どうやって食事したらこんな汚くなるのだろうか

「あれ？これって…」

テーブルの上に誰かの弁当箱が置いてある…：まさか…誰か忘れた！？

名前を見ると、『花坂高校2年D組ミルク』と書かれていた…：つてゆうかミルクさん、僕一応風邪ひいてますからね…

キンコンカンコン…

花坂高校の2時間目終了のチャイムがなり響く。ミルクのクラス、2年D組はいつもより騒がしい。

「ねえ聞いた？ウチの学校の元塚先生事故で死んだんだって」

「元塚って、あの元塚？セクハラで有名な？」

「そうそう。あいつ女子トイレにカメラ仕掛けたんでしょ？」

「3年の先輩とデキちゃったとか…」

「マジで！？ってミルク、聞いてる！？」

「ふえ？」

いきなり話をふられてマヌケな返答をするミルク。なんだか気分がよくない。今朝の夢のせいなのだろうか？それともカレーシチ

ユーハヤシライスDXのせいなのだろうか？ ……………やっぱりカ
レーシチューハヤシライスDXのせいだと思う…。

「すいませーん。僕、忘れ物を届けに来たんですけどー」

「あ？」

「だから、忘れ物を届けに…」

「え？」

……………僕は今、悪戦苦闘中だ。

僕が学校についた時にはすでに校門は閉じていて、仕方ないから、
そこらへんで掃除をしていた事務のおじいちゃんに、弁当を渡して
くれるように頼んだんだけど…………… 「忘れ物…」

「あ？なんだって？今からラブホテルに行こう？いやーわしゃア
ツチ系の趣味じゃないんじゃない？すまんのう、少年。悪いが他をあ
たってくれ」

……………言葉が、通じない… このじいさん、大丈夫なのだろうか？

こんな耳が遠くて、アツチ系の話をする人間が、日本の公務員を
やっちゃって良いのだろうか？ ってゆうか、誰もお前みたいなヤ
ツを誘おうとは思わないだろう。

「おじいさん、僕、へんな趣味してませんから…忘れものを届けに
来たんです！」

「なんじゃとおう！？わしの下半身はもう機能しないじゃとう！！
？」

「おいっ！！駄目だろ！いくら遠回しに表現しても、今の発言は駄
目だよ！！」

あ、ああ……………仕事なのに、いつもエロい事しか考えていないの
だろうか？

「も、もう良いですよ……………自分で届けに行きます……………あと、早く定
年退職して下さいね」 「もう定年じゃ。下半身はまだまだ20代じ
ゃがな」

「うるせえよ!!!!」

僕の学校探険は、まだ始まったばかりだ……

第12話くレタスとカビく（前書き）

今回だけシリアスです。次話からめっちゃ暴れます（多分……）

第12話〈レタスとカビ〉

あのじいさんとの馬鹿らしいやりとりを終えた僕は、今校舎にいる。

ってかこの学校は、敷地が広く、校舎も広い。

目指すは2年棟…けど、もうココがどこだか分かんない。

授業休憩らしく、生徒が賑やかに笑ったり、話したりしている。

もしかしたらミルクさんに会えるかも…

「あれ？ユウさん？どうしたんですか？こんなトコロで……」

「え？藍さん？」

いきなり後ろから声をかけたのは藍さんだった。

ってか藍さんと同じ高校だったんだ。

「何してるんですか？彼女探しですか？」

「彼女なんて…」

畜生このアマ…。僕は生きてから、一度も彼女ができたことがない。なんなんだ？人の悲しみを掘ってたのしいか？

「あ、あの、ミルクさん探しているんですけど」

「あたしに何か用？」

「って、ぎゃあああ！！ミルクさん！！いきなり現れないでくださいよっ」

僕の目の前に突如現れた怪獣・ヒンニューラ……じゃない、ミルクさん

「ってゆうか弁当！忘れてます！！」

僕は大事に持ってきた弁当をミルクさんにつき出す

「これ、昨日の弁当だし…さっさと帰って洗ってくれない？」

「……………へ？」

昨日の、弁当？

僕が頑張って持ってきたのに？

「授業始まるから、早く帰りなさいよ」

キーンコーンカーンコーン

「早く弁当洗ってちょうだいね」

「ユ、ユウさん、さよなら」

そして、魂の抜けた僕だけが、廊下に取り残された……

僕の名前はユウ・ハウスワーク。ご主人様の弁当を届けに来たが、実は昨日の弁当だったそうさ。

ってかもう……やだ。

普通さ、空の弁当って軽いじゃん。コレ、重いもん。よく中身を見たら、レタス一枚しか弁当食べてない。

レタス……弁当の主役じゃないよね？めっちゃ脇役だよね？

しかもすでに、弁当にはカビが生えている。早えよ……

ってか、また迷った。出口どこ？すると、後ろから声をかけられた。

「やあ、キミ、可愛いね」

ぞわり……何？この感覚？体がうまく動かない。

「おじさんと、イイことしない？」

ぞわりぞわりぞわり……

気持ち悪い。変態パンダよりも気持ち悪い。

「おじさんねえ、テクニカルだよ？いや、ホントに……」

「あの、僕男ですけどっ!!」

勇気を振り絞って振り向くと、そこには中年の教師が立っていた。

「知ってるよ。おじさん、キミの体を借りたいんだ」

「はっ!？」

「キミみたいな、容姿、羨ましいよ。とてもハンサムだよ」

オイ、今時ハンサムって使わねえぞ。

ってそれどころじゃないよ。

教師が一步步僕に近付いてくる。

ヤバイ。こいつヤバイよ！

「う、う、うあああああああ！！！」

僕の意識は、切れた。

屋敷にはすでに、全員が学校から帰って来ていた。

「ねえ、ユウ遅くない？つまらないなあイジメ相手いないじゃん」

「オイ、ミルク。あいつ学校に来たんだろ？何かしらねーのか？」

「し、知らないわよ！！多分買物でしょ！！？」

食堂に座るミカン、伽凜以外の6人の少女達。沈黙の空気が流れる。

「そういえば、今日はヤスヒトくんの命日じゃないですか？」

ミルクがピクリと反応をしめした。

ヤスヒトという人物は、ミルクの唯一の男友達であった。しかし、去年の夏休み、事故で亡くなったのだ

「そうですね。ミルクさん、お墓に行かなくて良いのですの？」

「えっ……………」

「ミルク、ヤスヒト、まだ好きだから…」

と、ちよつとだけしんみりした空気であったが……

「ヤッホーイでっす！！！」

「事件やでー！！！！」

バッターンと、勢いよく扉から飛びだしてきたミカン& a m p ;
伽凜。

「ど、どうしたんですか？」

「ミルクの高校で、痴漢事件が多発でっす！！！」

「そんなわけで、ウチらタコ焼き探偵が調べに行きはります！！！」
タコ焼きって……地味だなオイ。

「はあ！？今から行くの！？」

「せや。行くで」

「ついでにユウも探すでっす！！！」

と、ゆうことで、8人の少女達は学校へ向かって行ったのだった

.....

第13話　夜と学校と……

夜の学校は怖い。なんかもう、……マジで怖い。灯りは非常口の看板の緑の光。それに、消火器の光だけだ……

「って事で、ユウを探そう……!」

「探険や」

「幽霊カマーンです!!」

今、恐怖がアホ三人によって打ち消された…。

ちなみに、少女達がいるのは、昇降口。

「……ってゆうか、なんでみんな重装備なのよ…」

藍は巨大ハンマー、流音はおなじみカマボコバズーカ、ライは釘バット、そして桜子は…

「マシンガンですわ」

……ですわ、じゃないと思う。ってかユウを探しに來ただけなのに何故こんな武器があるのだ?

ちなみにアホ三人は、ハカマに日本刀。

「……とにかく、一階から探さなくちゃならないわね」

この学校は5階建てであるがために、探すのも一苦勞となるのだ。

「……によ」

どこからか声が聞こえた 「だ、誰ですか?によって言ったのは…?」

「はあ?んな声聞こえたか?」

「藍は目だけやなく、耳もおかしくなったんか?」

「そ、そんなあ……」

確かに藍の耳には

「によ」

という声が聞こえた。

「だいたい幽霊なんちゆうもんがおるわけ無いやん」

「伽凜の、言うとうり。エイリアンは、信じる。幽霊、信じない」

比較の基準が分からないよ。

「によ」

再びあの声。もう藍の脳はパニック状態である。

「ままままた！また！また！また聞こえましたよ！」

「私も聞こえましたわ」

風花は呆れた表情を浮かべる。

「お化けなんかないから！藍はビビり過ぎだつての。あたしが先頭をきるから、あんた達、女王についてきなさい」

その言葉の直後、風花以外の全員の体が凍った：

「へ？何？なんでかたまってんの？」

ミカンが凍った体を必死に動かし、風花の後ろを指す。

「ふ、ふ、風花………後ろ………ヤバイです………」

後ろ？と、思いながら、振り向くと、暗闇から腕が二本伸びていた……

「……………」

暗闇から腕が二本伸びてい……………

「……………」

暗闇から……………

「ぎゃああああああああ！！」

もはや風花の悲鳴は女の声ではない。獣の叫び声だ………。

「いやああああ！！」

続いて、藍も恐怖に堪えきれずに叫んだ。

腕は風花の胸をギツチリと掴み、暗闇へ引っ張る。

「いやあ！助けてえ〜！」

「ふ、風花あ！」

ライが助けを求める風花の腕を掴み、負けじと引っ張る。

「ラ、ライ………なんだか、離ればなれのお姫様と王子様のようね………」

…ウフン」

コイツは、この非常時に、しかも自分の身が危険なのに、何ほざいているのだろう……？

「う、うるせえ……畜生、オイっ！ミルク、桜子！お前らも手伝えってコラアアアア！逃げんじゃねえ！」

重装備しているハズの桜子はさっさと逃げている……。もちろんミルク達も：風花って仲間に見捨てられたんだね。

謎の両腕はさらに力いっぱい引っ張る。

「あゝん！胸が潰れちゃうっって余裕なコト言ってる場合じゃないから！腕！あたしの腕ちぎれるよライ〜！」

「くそっ！……女子野球部なめんなよっ！」

しかし、とうとうライの手から風花の腕が放されてしまった。

「きやああああああ！！！」

風花は昇降口から一番近い部屋、職員室に引きずられて、消えてしまった。

鍵もかかっており、開かない。しかたなく、釘バットでドアを破壊する。

「クソッ！」

ガンッ！

ガンッ！

ライは釘バットでドアを

破壊する。その音の合間に、風花の声が聞こえてきた。

「…あっ！あうん……痛っ……はう……そ、そこ……そこが……」

ガンッガンッガンッ！！

破壊するテンポを急にライは上げた。

まさか、まさか風花……！

えっちな事を……！？ ガンッガンッガンッ！！

「こ、壊れないっ……」

ってゆうか、壊れて欲しくない。壊れないで、ドア……。それがライの今最大の願いだった……………

続く

第14話〈ミルクと音楽準備室〉（前書き）

評価して下さい、アサゴロモは鳥になります

第14話〈ミルクと音楽準備室〉

ガラッ!!

「っはあっは

あっ……! みんな、いる?」

「い、いるでっす……風花とライ以外……でっすけど……」

「あいっら死んだかもしれんわな」

見事仲間を捨て、自分の命を守り通したミルク達……。どうやらコイツらに友情なんて言葉はないらしい……。彼女達が逃げ込んだ所は音楽室である。昼は吹奏楽部が使い、賑わうが、やはり夜となると、恐いものである。「ってかアレ何なのよ」

「多分アレですよ……妖怪『腕ニヨッキ』!」

そんな妖怪が存在するのなら、是非見てみたい。

「それ、知ってる。確か、事故で、腕を失った、女の子の霊」

「恐っ!!! 名前が地味なわりにはエピソード恐いよ!」

「では皆さん、私達の為に命を落とした二人に黙祷を捧げましょう

……」

頭を下げた桜子の耳に、ライの声が聞こえた。

「さ、桜子オ」

「あぁっ……! ライさんの声が……きつと成仏できなかったんですわ」

声をあげて泣く桜子。そして彼女の後ろには、釘バットを担ぐライ。

「桜子!!!! 俺は生きてるっつの!!! テメェ風花と俺を助けずにさっさと逃げやがって!!! だいたいマシンガン持ってんなら戦えや!!!」

ご立腹のライさん。そして、ライが生きてることを少しつまらなそうにしている桜子さん。

「で、風花はどうなったのよ!??」

「死んだでっすか!?! ニヨッキニヨッキに殺られたでっすか?」

「あゝ! 風花がおらんと、S女王誰がやんねん」

「えっ……いや……その……風花は職員室に連れてかれて……そ
んで…ニヨッキに……お、犯……ってか、イヤらしい声が……」

カツーン カツーン

ライの言葉は謎の足音で遮られた。何かが近付いてくる。なんだ?
緊張と恐怖が体を縛る。

「な、なんでしよう? この足音」

カツーン カツーン

足音は音楽室の前で止まる。

ガラッ

「によ」

現れたのはニヨッキだった。

ミルク達は教壇の陰に隠れる。ってか狭い。苦しい

「によ」

ニヨッキは教壇の方へ近付いて行った。と、その時

「今だああ!!」

と、ライが部屋の電気をつけ、

「いくでっす!」

と戦闘モードにうつるミカン。

しかし、その戦闘モードはすぐに覇気を失った。なぜならそのニ
ヨッキの正体が……

「ユ、ユウでっすか?」

目の前に立っているニヨッキ、ってかユウは顔色が明らかにおか
しい。隠れていたミルクは、ユウの肩を掴んだ。

「ちよつと、ユウ!! あんた何やって…!」

モミモミモミモミ

「え?」

モミモミモミモミ

「によよよによよ」

第15話くミカンと念仏く（前書き）

大変長らくお待たせしましたく！すいません！評価して下さい、アサゴロモのネタの花が満開になります。

第15話　ミカンと念仏

「…ユウさん、分かってるんでっすよ？ 貴方が風花さんとミルクさんに大人の階段を昇らせたのは…」

「ち、ちゃうわっ！！ 僕、確かに男になりとうてなりとうてしやーなかった…せやけど、大人の階段の…ぼる…♪は、まだせえへん！」
「ユウさあん、証拠はあるんでっすよ？ ボク達がちゃんと目撃したでっす」

「………すいませ〜ん」

何？ これ？ サスペンスの真似？

ちなみに、出演…ミカン（渋い刑事役）、伽凜（逃げ場を失ったユウ役）、以上二名。

「そんな目撃、人違いやったかもしれんやろ！？」

「ふふん、あくまでもしらすを通すつもりでっすか…それじゃあ、ついでに聞くでっす、風花とミルクのカップを言うでっす！！」
「ビッシー！ と伽凜に指差すミカン。でもセリフと合っていない。」

「風花はEカップや！ ちなみに揉みごたえは花マルやで！！ ミルクはAAや！！ 豆粒の方がまだでかくてエエって！ ついでにミルクのは揉んでも、骨と、心拍数しか感じる事がでけへん！！！」

ぎやははは〜！ と笑いだす二人。どうやらサスペンスは終わったようだ。

ミルクが大人の階段昇った後、ミカン達は再び昇降口に来ていた。

「オイ、ユウ、明らかにおかしかったよな？」

「そうですね。顔色もよくなかった様ですし、変な事ブツブツ言ってますし」

「多分風邪ひいて頭狂ったのですわ。私がマシンガンでぶっ殺してもよくてよ？」

何笑顔で凄いこと言ってんだよ桜子さん。

「ユウ、元塚先生に、取り付かれている。風邪ひいたから、幽霊抵

抗力ない。だから取り付かれた」

けーたい用カマボコ・タコ味、と書かれた袋からカマボコを一個取りだし、小さな口に放り込む流音。ってか生臭い。頼むからその悪趣味なカマボコしまって欲しい。

「なんでお前が元塚のこと知ってんだよ」

ふふふふと真顔で笑う流音。……怖い。ホラー映画でバツチリ主役とれるよ。ってか、その笑顔で生きる力を吸い取られそう。

「実は、カマボコ小型カメラRXを、日本中に仕掛けた。Rは流音。Xは二次関数。夢は日本侵略」

勝手に言ってるガキが。なんだよ二次関数って？ しかも、ちやっかり日本侵略しようとしてるし。「ユウが言ってた、によゝは、女体のいみ。元塚先生、女体好き」

「そんなじゃあ除霊すりゃあ良いんだな？」

「簡単でつすゝ！！消火器で殴り殺すでつす！！」

いや、殺したら意味ないだろう。

「ちよいまち。アイツの声聞こえん？」

珍しく、伽凜の目付きは鋭く、何かに集中していた

「によゝ」

暗闇の廊下から現れるユウ。ついでに下着姿のミルクを背負っている。桜子達を見つけたとたん、いきなり突進してきた。いや、実際怖いよ？有名なゾンビ映画より怖いよ？

「消火器スマッシュ！」

あ、なんかRPGみたいな技でカッコいいね。

ミカンは

「火事になったら使ってねん。うふん」

と書かれた消火器をとり、安全装置をひん抜いて、ユウにむけて泡を放った。

ぶっしゅゝゝゝ！

「によ、によたい、女体、好き好き」

泡をかぶりながら、なおも突進してくるユウ。これじゃあ、ユ

ウを倒せないでっす！桜子たちの力もかりなきやでっす！

「桜子！！マシンガン用意するでっす！」

と、勢いよく振り向いて言うのは良いけど…。

ミカンの後ろには、誰もいなかった。

あれ？ボク見捨てられたでっすか？

とか思いながら、辺りを見回す。

よく見ると、桜子たちは職員室に逃げていた。

ついでに伽凜は

「お前のことは忘れへんで。イッてこい。」と書かれた紙をドアの窓に張っていた。

「伽凜のオオオ！！馬鹿ああああでっすうううう！！」

泣きながら職員室のドアを開けようとするが、鍵がかかって開かない。

「開けるでっす！！開けるでっすう！ボクはまだ少女でいたいんでっす！！わいせつ物陳列罪でっすう！シスコンでっす！シリコンでっすう！」

シリコン関係ない。

で、ドアによって声がよく聞こえないのだが、桜子がミカンの念仏を唱えているのはすぐに分かった。

「嫌ああああでっすう！」

危機的状況でも、ちゃんと語尾言ってるね。

ミカンの肩に誰かの手が触れた。

からくり人形のように、ゆっくりと振り向く。

そこには、気持悪いくらいの笑顔のユウ。

「イヤ、でっす…」

そして、ミカンは下駄箱の方へ引きずられ……

「ひあっ……あっあっ……ユ、ユウ、ボク、怖かったでっすけど……あふっ……これ、気持ちでっすね……イヤっ……あん」

その声は、職員室まで聞こえていた。

「ミカンが、ウチよりも先に、大人になってしもうた……」

と、ちよつとショックな伽凜。

変態ユウの犠牲者は、これで3人となった……。。

続く!!

第16話〈恋愛小説〉

「あっ…あゝソコでっす!!そこもつと強く」

前回に引き続き、まだミカンはユウの手から逃れることは出来ていなかった。職員室に逃げ込んでいる桜子たちにもその声は聞こえる。

「チツキシヨオオオ!!!やっぱミカンを見捨てられへんわあああ
!!!!」

と、何故か袴姿で職員室を出る伽凜。

「あぁっ!!そっち行ったらヤラれちゃいますよう!」

「大丈夫や!!ウチ、実は実家が神社なんやねんで!!ついでに本家は寺さかい、バッチリ除霊できるわ!!………多分」

お前の一言は信用を無くすな。

伽凜はだだだだだ〜と下駄箱の裏に走った。

そこには――……

グリグリグリグリ…

「ひぁっ!!あはぁっあんツ」

相変わらず甘い声を出すミカンと、

「にょにょ」

相変わらず除霊されていないユウだった。

グリグリグリグリ

「あゝメツチャ気持ち良いでっす……あん…あふっ」

グリグリグリグリ

ユウはミカンの肩を揉んでやる。

その度にえっちな声をだすミカン。

ちなみにこの二人がやっているのは、えっちなことではなくて…

……

「なんやそれ？ マッサージ？」

マッサージでしたあ！！

「か、伽凜！！ 気持ちいでっすよ！！ あはんっなんか、ツボを的確につやんっ」

なんか、ホラ、読者がこの話全部エロいって思われちゃうじゃん。ちなみに、ミルクも風花もマッサージでイきました。

やめてよね、そーゆー紛らわしいえっちな声とか。

「ってかソコ退き。除霊するで」

「によ！！！！ によ！！！！」

伽凜に気付いたユウは、マッサージを止め、暴れだした。

伽凜は深呼吸をし、精神統一をはかる。

両手を合わせて、お経っぽいのを唱えだした。

「ハンニャンカムソナ。ハンニャンカムソナ。アニヨハセヨ。ハロ
ー。ボンジュール。ア、ツギ、ナンダッケ？ ハンニャンカムソナ。
ツテカ、ブツチャケ、オキヨウナンテ、シラネエヨ。かあああああ
ああつ！！」

おい、なんか最初は北朝鮮語っぽかったぞ？ 途中から世界でこんなにちは？

ってかお経しらねえなら言うなよ。

で、そのお経で除霊できたかというと……………。

「うっ…によっ…！！…女体……………無念…！！」

除霊できてました。

ユウの体は狂ったように、盆踊りをした後、倒れこんでしまった。

「ス、スゲエじゃねえか伽凜！！！！」

「伽凜、ただの馬鹿じゃなかった。これ、好感度が上がった」

「すばらしいですわ。たった独りでここまでやるなんてっ！！」

「ってか、風花さん起きないんですけど〜！」

職員室から飛びだす桜子たち。プラス熟睡している風花。

「伽凜、すごいでっす！！ さすが巫女さんでっす！！」

「せやろ？ウチを讚えなアカンで。ウオッホッホ！」

こんな馬鹿げた巫女なんか、誰も欲していない。

「あれ？……どうしてアタシここにいるのよ？……ってアタシ下着姿じゃん！！！」

「ミルクも起きたんか」

ミルクは急いで廊下にはさまかれた自分の服を着る。

ミカンは気絶しているユウに、臭そうな靴を下駄箱から取り、鼻に当てていた。

「……うっなんか臭っ！！キタねえ靴鼻にあてんなよ。マジ臭い！！」

見事目を覚ましたユウ。むっくりとからだを起こした。

除霊はできたのだが、なにか不陰気が違う。

「お前、ユウちゃうやろ？誰や？」

「あ？オレ？オレ、ヤスヒトだよ。ほら、去年死んだ」

さて皆さん、ヤスヒト君を覚えていますか？

「レタスとカビ」

で名前だけでたヤスヒト君。

「元塚が除霊されて、よかった〜マジあいっうぜえし。あ、ユウ君だっけ？ごめんな。勝手に体借りて」

「何の用や？さっさと出ていかんと、除霊するで？」

「いやいや、そんなオツカネーこと言うなって。オレはミルクに用があつて来たんだよ」

「え？」

ミルクは顔を赤く染めながら、ヤスヒトに近付く。

まだヤスヒトが話しているなんて半信半疑なのだが、あの軽い口調はヤスヒトに違いない。

「久しぶり、ミルク」

「えっ、あ……ヤスヒト、君」

見た目はユウなのに、何故か大好きだったヤスヒトに見える。

「オレさ、死んでから、ずっと後悔してたんだ」

「何を？」

するとヤスヒトはミルクを抱き寄せて、口付けをした。

一瞬だけ時間が止まった様な感覚。

あまりにも突然のことで、伽凜もアホミカンも何も言えなかった。

「死んで後悔したんだ。ミルクにちゃんと好きって言えなくて」

「あっ…………ヤスヒト君」

思わず涙がミルクの目から溢れだした。

ずっと想いつづけていたヤスヒト。でも、自分の気持ちを伝えることはできなかった。

「アタシも、ずっとずっと、好きでした。でも、それを伝えられなくて…………」

ヤスヒトは優しく微笑み、ミルクの頭を撫でてやる。

「ありがとう。それじゃあ、オレ逝くね。盆には会えるから」

笑いながら言うが、どこか寂しさを隠すヤスヒト。

「ユウに、体借りてゴメンって言うておいて」

泣きながら頷くミルク。

「大好きだからね、ヤスヒト君」

「オレも、大好きだよ」

そう言い残し、ヤスヒトは消えた。

「ふにゃらあっ」

またもや気を失うユウ。

誰もが、中身が違うだけで、こんなに人は変わるんだ、と思った。体の力が抜けたユウはミルクの方へ倒れこみ…………

ズルッ!!!!

「キヤアア!!」

ミルクのスカートとパンツを下げてしまいました。

ほら、人間って倒れそうな時、なにかに捕まるじゃん。それだよそ

れ。

「ユウの、馬鹿ああああ!!」

おしまい

第17話〈ネコに芸〉

チュンチュンチュン……

日曜の朝の眩しい太陽が僕の体を照らす。

嗚呼、今日も使用人生活が始まるのか……（溜め息）。

僕は思いきり腕を伸ばし、体の神経を叩き起こした。

「ふにゃあああ」

大きなあくびをすると、なんかネコの鳴き声が聞こえる。

ありゃ？猫どこだ？

辺りを見回しても猫はいない。

ってかなんか、今日は世界が違って見える。なんか妙に家具がデカくなったような……。

それに首かゆい。なんで？

僕は足で首をかいた。

ん？

かけるわけねえじゃん。

僕は自分の体をよく見てみると……

「にゃあ（猫になってる）」

……あああああああああ！！！！

そういえば昨日の夜、アキバで仕事をやってきた風花さんから僕はおみやげを貰った。

もう僕は感動で感動で、過呼吸になったもんだ。

僕はハイテンションで包みを破くと……

「何コレ？ネコ耳？古くね？」

そう、おみやげは可愛いネコ耳だったのだ。

「ユウに似合うと思って買ったんだよ♪っ・け・て♪」

誰が付けるかああああ！

「なんですか？悪質な嫌がらせですか？」

「ベタ技でエプロンも付けるでっす！！！」

「いっそのこと、裸エプロンやれやゝぎやははゝ！！」
なにこいつら？僕の尊厳をかき消すつもり？

「絶対可愛いからさゝ！つけなよ」

「いやっ、ちよっ待って！！伽凜さん！足抑えないでくだゝってミカンちゃんも！！ぎゃああああ！！風花さあん！！それ接着剤ついてる！！！！ネコ耳とれないじゃないですかっ！！！！あああああ！！！！」

とゆうこで昨日ネコ耳をつけられた。しかも、風呂に入っても取れないときたもんだ。

それで朝、僕はネコになっちゃったわけ？

「にゃあ（どうしよう）」

とりあえず、下に降りよう。と言っても、開けられない。ってかご主人様は朝ごはん作れるのか？

「ユウウウウウ！！！」

どたどたと騒がしい足音が僕の部屋に近付いてくる。
バンッ！！

「ユウ！！起きるでっす！！ユウがいないと、ボクたちごはん食べれないでっす！！！」

ドアを勢い良く開けて来たのはミカンちゃん。

うわあ…一番会いたくなかったよ…………

ミカンちゃんは僕を見つけ、目を輝かせた。

なんかCGでキラキラの星が出てそうだ。

「ネコでっすう！」

ムギユウウ

「うにゃあ」

ミカンちゃんは僕を抱きかかえた。ってか、苦しい。肋骨折れるから！

「みんなに見せるでっす！お前の名前は……ミラクル・パラソワネツト・B・カトリーヌ・ケネディーナでっす！略してミケ！！」
普通にミケにしろや。

食堂に降りると、ミルクさん達がカップラーメンを食べていた。
そして僕を見るなり、

「ネコ？捨ててきなさいよ」

「それも朝飯なん？」

「毛がラーメンに入るだろ？」

「ネコ嫌いですよ」

「ミカンちゃん、そのネコ病気になるかもしれませんわよ？」

「かまぼこ、食べられる」

「なんか目が生意気じゃない？」

え？好感度ゼロ？しかも捨てるとか言うな

「このネコの名前はミラクル・パラサイト・D・カトリーヌ・ケネディーナでっす！略してミケ！！」

おい、名前違うぞ？

パラサイト？虫？

「捨てネコでっす！昨日、正門で『拾って下さい』ってかいてる箱に入ってたでっす。だからボクは、『さむいだろう？ボクのペチャンコオッパイで温まり』ってことで、ネコを拾ってきたでっす！！」

「にゃあ（なんだよ、その話）」

「やっぱりこのネコ、ボクに慣ついでいるでっす！」

「にゃああ（ありません）」

ご主人様たちは朝食の後片付けをしはじめてしまった。

ミカンちゃんは、かまってももらえないのが悔しいらしく、僕の首をギユウつと絞めやがった。

「うにゃああ（ぬおおお！死ぬっ！）」

「ミケは凄い芸できるんでっすよ！？もう、メツチャ凄いんでっす

よ!？」

あきれた様子で、ご主人様はミカンの方へ目を向ける。つか、芸なんて何すればいいのさ。

「ミケ!! おすわり!」

「うにゃあ」

ペタンとテーブルに座る僕。

「お手!!!!!!」

「にゃあ」

「へえ、ちゃんと出来とるやないか」

「でも、基本的な、ことばかり」

むうううとホッペを膨らませるミカンちゃん。お次はなに? 僕はもう使用人じゃない。なんとでも命令したまえ。うわっはあゝい! ウヒヤヒヤヒヤヒヤ。

ミカンちゃんは次の芸を命じた。

「オチンチン!!!!」

あ、オチンチンね……

って……は?

お前なんつった?

「オチンチンでっす!!!!」

「う、うにゃ?」

おい、それって犬限定の芸じゃないの?

「オチンチンでっす!!!! オチンチンチンチンチンチンチンチンチンチンチンウ○チ!!!!」

ちよつとおおお!! 女子中学生がそんなコトバ……ちよつ……ダメでしょおお

しかも最後は最低な単語だし。2回目だよね? この単語でたの。この小説下ネタばっかって思われるじゃん! !

番外編第2話く毘と北の国からく（前書き）

続・番外編です。

こんなアホ小説でも、評価して

下されば、更新スピードが上がったり、アサゴロモの身長が伸びます。

番外編第2話　髭と北の国から

「ランランラランランラン♪ランランララ〜ン♪」

白ユウ姫……ってか僕はは、某巨大昆虫アニメの有名な歌を歌って散歩をしている。

青い空、白い雲、爽やかな風、生い茂る木々……そしてパンダ。
「なんて今日は気持ちが良いんでしょう！！！！って違うわああああああああ！！！」

「うひょっ！！ノリツツコミかい？いいねえ」

大木の陰に隠れていたパンダ……正確にはパンダの覆面をした、下半身女性用下着を身に付けた変態、が現れた。

「君さあ〜可愛いいね〜おじさんと、気持ちいい〜ことしない？」
じいわじわと近付いてくるパンダ。

「い、いやです！！なんですか？あなた！？」

キキキキキ、キモイよ！！

何がキモイって、露出している胸毛がキモイ！！

しかも息荒いしい〜

「うひょっうひょっ！！君のオッパイ大きいかなあ〜？うひょひょひょ」

なんか指を曲げたり伸ばしたりして、近付いてくるよ！！

「おじさんねえ〜女の子が大好きなんだああ」

ムギユウとパンダに抱られる僕。

「うぎやああああああああ死ぬう！！」

そして、頬を僕の顔に擦り付けてきた。

「いやああああああ死ぬう！！」

とうとう僕は、パンダの手の中で気を失ってしまった。

なんか表現エロいな。

「ありゃ？酷いなあ。次から楽しいのにい」

パンダは舌打ちをし、気を失った僕のスカートの中に潜り込み、

パンツを盗みやがった。

「うひよおおお！脱ぎたてパンツ！！ぬふっ」

そう言い残し、パンダは消えていった。

ってかコレ犯罪だからね？いくら、溜ってても、こんなことしちゃ駄目だよ？

「……………ん？あれ？」

僕は森の中で気を失っていたハズなのだが、なぜかベットの上で眠っていた。

周りを見渡すと、木製のベットが自分のもいれて6つあり、イスも6つあった。部屋はなんかビンボーさんが集まる、銭〇に出演できるとはないか？というくらい小さい。

しかもテーブルは、なんかキツタナイ！

かまぼこのスープ（おそらく味噌とかまぼこだけしか入っていない）やら、かまぼこの塩焼き（まるまる一個だから、中まで焼けてなさそう）やら、かまぼことカニかまのサラダとか……………もういいよ。

その料理？をテーブルにぶちこぼしているワケだ。

ナニコレ？精神的なイジメ？

僕にシンデレラになれと？

そのとき、いきなり古びたドアが開けられた。

「んっあゝゝ！！起きてるべさ！！みんな！！あんの女の子、起きてるどゝ！」

あ……………なに？

「北の国から」
？

僕を指差す女の子。ってか、なまってるない？

次から次へと女の子達が入ってきた。

1、2、3、4……………7人いる……………すいませえん。狭いんですけどお。明らかにこの部屋の酸素濃度低くなってますよおゝ？

「うわゝ可愛い子でっす」

「どっかのお姫さんかいな？」

「違うズラ、たぶん……エイリアンだズラ」

「エ、エイリアンなんていないでいい！」

「綺麗な肌しちよるのお」

「なにか温かいものをのみますかな？」

「えらいメンコイことゝ。オラの家、ちっせえけど、一緒に住まねえが？」

「……なに？初対面でいきなり同居？話の展開めちゃくちゃじゃね？」

語尾もめちゃくちゃじゃね？一部かわってないけど……。

「オラの名前は、貧乳ミルクだべさ」

あゝあの貧乳娘ね。

「ボクはミカンでっす！」

いわれなくても分かるよ。

「ウチは伽凜や。よろしくしてな」

あんたも分かるよ。

「私は、流音ズラ。好物は、かまぼこズラ」

ああ、なんか語尾が……語尾があゝ

「わ、私は藍でしっ！メガネがないと、目が見えないでっし！」

ミカンとかぶるだろ？その語尾。

「ワシは桜子じゃけん。胸はGカップじゃ」

坂本竜馬風？桜子さん、メツチャキャラ変わってるよ。

「自分はライと申しますぞ。いやゝ綺麗な顔してますな」
ライさんジジくさっ！！

なんかライさんの顔で、その口調嫌だわ。

「とりあえず、オラ達と暮らすんなら、仕事を手伝って欲しいんだべよ」

おiiiiいゝ勝手に僕を住ませて、仕事やらさるなんて、僕使用人

じゃんくいや、本業は使用人だけど：

「し、仕事って、何すればいいんですか？」

「オラ達の仕事はなあく」

「仕事は？」

「ピーナッツの殻むき」

誰がやるかあああああああ！！！！！！

続くハズ

第18話　煮干とお風呂

僕がネコになってから半日、ミカンちゃんが3時間説得したあげく、僕を飼うことになった。

で、今は夕飯の支度。

「ユウがいたら、支度しなくていいのに！」

「魚しかないでっすう!!」

「ちょっ! 魚振り回さないで下さいよう!!」

「うろこ飛んでるぞ!! くさっ! 生臭い!!」

「フグあるでっ!」

「そいじゃあ、丸ごと食べよう!!」

「それって……死ぬのではないのですの?」

「かまぼこ食べてれば、生きていける」

……相変わらず低レベルの会話だ。

「キャアアア! フライパンから火が吹いてるわよ!」

「魚が焦げてるじゃないですかあ!」

「フグ美味しいですすね、ミカン」

「ホンマやゝメツチャ上手い! ライもどうや?」

「お前ら、ちゃんと内臓とって食えよ!! 毒で死ぬぞ!」

「もう、食料ないですわ」

「かまぼこオ」

「アンタ、かまぼこしかないの? ちくわとか、カニかまとか……」

そんな馬鹿会話で、出来た食事……

「にゃ……にゃあ(に、にぼし)?」

「今日のゝ! ご飯はあゝ! なんと!! 煮干しよ!!」

「フウゝ! カルシウムうゝ!」

「カルシウム最高でっすゝ!」

「骨が喉に刺さってもたゝ!!」

……しかも、僕は煮干しの頭だけ……

って誰が食うかあああああ!!!

おい、なんか扱い酷くない?

「ってかユウいないと色々と不便よね」

「あたしのSMプレイに耐えられなかったんじゃない?だって、この前ユウの嫌いなゴキブリをユウの靴に入れたりしたし……」

あんたがやったのかあああああ!!!??

ちよっ、あの時、マジ、マジで失神したんだよ!

バカタレがあああ!!!

「桜子!ミケとお風呂に入っても良いでっすか?」

「そうですねえ……ミケと家族全員で、入りましょうか」

「やったでっす!!!」

え?ちよっと、それってヤバくない?だって皆ハダカになるんでしょ?

そのとき、僕の理性と本能が話かけた。

理性

「ダメだよ!!!お風呂に入っちゃ!ユウは男のコなんだよ!」

本能

「いいじゃねえかよ。男は常に女のハンターなんだぜ?」

理性

「ユウ!!!君には良心がある!入っちゃダメだ!」

本能

「うるせー!ユウは女の乳や○○や××に興味がある年頃なんだぞ!?!」

理性

「こういうときは、本人の判断だよ!!!」

僕

「えっ!?!だって……ご主人様がホントの僕の正体をしつたら……」

理性

「そう!正体をしられたら、殺されるよ!」

このとき、僕の本能は甘い言葉を口にする。

本能

「…………湯気の向こうはピンクの二つ丘と、綺麗な花びらだぜ？」

……………

……………（＊ー▽ー＊）

「ニャアア（お風呂入ろおお！！）」

第19話　猫とハンマーと僕

かぼーん

温かい湯気がたちこもり、適度な湿度とお湯加減。

「あったかあいですう」

「うにゃああ」

前回到引き続きネコのままの僕。

ちなみに今は入浴中。裸のミカンちゃんは、巨大風呂に僕と入っている。

もちろんミカンちゃんは裸。ってか、男として言いたいことは、ミカンちゃんのボディーについてだ。

一応中学なのに、胸は幼稚園児くらいしかない。なんだろ？逆にソコが萌えるのかな？

「ミケ、温かいですか？」

「にゃあ」

「ボクも温かいですう」

あゝ気持ち。なんか眠くなってきたあ……………と思いきや、いきなり頭にパコーンと桶が当たった。

「ありゃ、ミケに当たってもうた」

「ミカン〜！！久しぶりに野球拳しよ〜！！」

「全員参加やで〜！敗者は明日の朝食作りになつとるからな」

や、野球拳…？こいつら、やってたの？

解説しよう！野球拳とは、お互いジャンケンし、負けたら服を一枚ずつ脱がなければならないゲームだ！！要は、オヤジが好きそうなゲームである。

「やるですう！！野球拳〜！！」

野球拳やろうにも、脱がなければならないのはバスタオルだけだ。つまり、ピンクの二つの丘と、綺麗な花びらをすぐに見れるということ。

「はい！野球拳始めるよお！！」

「ほ、ほんとにやるんですかあ？」

「ジャンケン俺弱いし……」

愚痴をこぼす藍さんとライさん。

それを無視してゲームは始まった。

第1試合目

ミルク×桜子

「はいッ！！第1試合開始ッ！」

風花さんの合図でゲームが始まる。

「負けないわよッ！朝食作りなんて嫌だからッ」

「ふふふ。お互い様ですわ」

あ、今なんか火花見えた。

「「せえの！ジャンケンぽん！！」」

二人の掛け声が風呂場に響く。そして勝敗は……

ミルクさん、チョキ。

桜子さんグー……。

つまり……

「あたしの負けえ！？嫌ああ！！」

「ふふふ。早く脱ぎなさい」

「ちなみにいッ！罰ゲームとして、負けた人はセクシーポーズをとってもらいます」

「ちよつと！！風花あ！」

「M字開脚！M字開脚でっす！！」

「裸で側転やってみい！ぎやははは」

うっわぁっこいつら最悪だ。

すでにミルクさんは全裸……なのだが、なんかピンとこない……下から上まで見上げ……分かった。この人、貧乳だった。

ちなみにミルクさんのセクシーポーズはイナバウアーだった。別にセクシーでもなんでもない。

第2試合目

藍×ライ

「えーやりたくないですよ」

「いいの！ちゃんとやるの！！コラっライも逃げるなあ」

「なんで、やんなきゃなんねえんだよ。つか、セクシーポーズってなんだよ？」

「ライ、まともなツツコミ、風花に通じない」

流音ちゃんは、なぜかすでに全裸。胸もミルクさん並にない。

「いくよ！せえの！ジャンケンぽん！！」

無理矢理ジャンケンをさせる風花さん。

「あ！私の……負けですう」

藍さんパーでライさんチョキ。

ライさんは勝利の喜びにひたり、藍さんは地獄を見ている。

「藍、ルールはルールだからね。早く脱いでセクシーポーズ！！」

「わ、私嫌ッ！！嫌ああああ！！！！」

「ちよっ！藍！どうしたでっすか！？」

泣きやまない藍さん。

ご主人様たちは、一気に血の気がひいた。

「アカン。藍のマジギレもおどになるで？」

ドオオン！！

「ふざけんなあああ！！」

藍さんはどこからか、巨大ハンマーを床に叩きつける。

「全員回避い。かまぼこと共に」

一斉に逃げ出すご主人様。……って僕はあ！！！？？

「にやああああ！！（オイこら！！！！置いてかないで！！可愛いミケちゃんが、粉碎されるっ！！）」

風呂場には僕だけが、取り残されているのだと思ったのだが、

「きやあああ！！ちよっと！！藍！あたしを殺さないで！」

ドオオオンと再びハンマーをふりおろす。

すると、藍さんはミルクさんを軽々と持ちあげた。

「いや！藍い！放しなさいよ！」

「セクシーポーズなんか知るかあああああ！！」

「いやあああああ！！」

藍さんは僕に向かってミルクさんを投げ飛ばした。

「にやっにやっ！（えっ！ちょっと待って！！）」

ミルクさんは近付いて近付いて……

どぼおん！！

水しぶきと共に、僕はお湯の中へ沈む。

「ぶっはああッ！！ゲホッゲホッ！！死ぬかと思ったあ……………つてアレ？」

いつのまにか、体が人間に戻っている。

湯舟には、ネコミミカチューシャ。もしかして、一日たったら人間の体に戻るってやつ？

まあ良かった。人間に戻れ……………

「ユ、ユウ？ユウでっすか？」

「あんた、アタシ達の裸、見てたんだよね？」

「つか、ユウも裸やん。エライ汚いもん見せとるなあ」

「下着ドロんとき最悪だ」

「犯罪ですわね。完璧に」

「ひゃくとーばん」

皆の目は非常に冷たいってか…………軽蔑ってか…………

「ユウ！！ミケはユウだったの！？ちよつと！！これ少年院行きよっ！！」

「えっちよつと！！誤解ですって！！誤解…………」

僕の背中に殺気が走った…………振り向くと藍さんがハンマーを構えていた。

「あゝ…………」

「死ねボケええええええ！！」

「ぎやあああああ！！！！」

強制終了……バイ

流音
続く

第20話〈メリークリスマスと七夕〉（前書き）

メリークリスマス

第20話〈メリークリスマスと七夕〉

12月24日……そう、恋人たちのクリスマス。

僕はご主人様とクリスマス。

……楽しくねえ。

聖なるクリスマスじゃなくて、邪悪なるクリスマスになるよ……。

が、しかし、僕が問題なく(?)使用人の仕事をできたのも、彼女らのおかげだと、いやいや信じている。

と、いうことで、僕はサンタに化けてクリスマスプレゼントをあげようと思うのだ。僕って優しい!!

皆がなにが欲しいか、すぐ分かる。なぜなら……ツリーに、欲しいもののリストを七夕のようにぶら下げているから。

ひとこと言っている?

馬鹿じゃねえの?

しかも、ツリーの飾りに藁人形あるよ?僕の写真つきで……。とりあえず、欲しいもののリストの一枚目を読む。

「えっと、『クリスマスに、彼氏ください。ユウミたいな馬鹿はイヤです。たのむから、サンタさん、彼氏をください。BY風花』……」

嫌がらせの伝言板?

しょっぱなからプレゼントじゃないし……

次の欲しいもののリスト

『サンタ様、サンタ様、……頼みますから、胸ください。Aカップで良いので下さい。BYミルク』

欲望のままだな。

どんだけサンタを崇拜してんのさ?

『メガネ拭き下さい』

名前なくても分かるよ……藍さんでしょ?

しかもサンタにメガネ拭きってどうよ？

貧乏くさっ！！

『かまぼこによる、かまぼこの、かまぼこのためのかまぼこB Y流音』

もう、かまぼこってなんなのか分かんなくなってきた。

『マシンガンが欲しいB Y桜子』

サンタって夢を届けるハズなんだけど……殺意しか届けられかね？

『女らしさB Yライ』

あ、無理

『サンタさん、隣街の宝石店のダイヤとってこいB Y伽凜』

……命令形？

しかも泥棒じゃん。

『ドラ○もんB Yミカン』

おい、馬鹿だろ？

こいつ馬鹿だろ？

『あ、やっぱり、彼氏は良いので、奴隷下さい。ユウミたいなのは嫌ですB Y風花』

え？なに？僕を全面否定？

『サンタ様、サンタ様、サンタ様様、マジでAカップで良いです。

牛なみの乳でなくても良いです。B Yミルク』

お前はしつこいな。

『バットと、ボール、そして女子野球部員100にんほどこださいB Yライ』

100人ほどって……何チーム作る気だよ

『くまさんパンツ。しかも、シルクで……B Y藍』

くまさんでシルクっておかしいだろ？つか藍さんに似合わない。

『愛と夢と希望B Y桜子』

……ツツコミづらっ……！

『ミッション！隣街の宝石店からダイヤを奪え！！ポイント！！裏

口は、鍵が壊れているから、侵入しやすいぞ！B Y伽凜』

おい、子供たちのサンタさんが犯罪者になっちゃうよ。クリスマス早々新聞の1面飾っちゃう。

『同じクラスの山田くんの従兄弟のお母さんの腹違いの妹の夫の親戚のおじさんと古くからしたい従兄弟の弟の嫁のお父さん、つまり、近所の川辺さんのネコが欲しいB Yミカン』

始めから川辺さんって書けやあああああああ！！めっちゃ読みにくいじゃん！！ってか、川辺さんと山田くんってもう関係ないじゃん！！

続く

第21話〈烏丸と誘拐〉

冬の澄みきった夜、一人の少女は、自分の倍はあるリュックを背負って歩いていた。

彼女が今現在いるのは、烏丸山という、地元の人ならば誰でも知っているという山である。

「ふう……ついた」

白い息が輝く星空へと昇ってゆく。

少女はリュックを下ろし、中を荒しながら望遠鏡を取り出した。しかも高そうなヤツ。

次に簡易テーブル、ノート、筆記用具、そして何故かかまぼこ。

「新しい星、見つける」

すると、いつもボケツとした少女の目が太陽のように輝きだした。ってか、もう分かるでしょ？ 分かんないヤツ第1話から読んで。

頼むから。

少女の名前は光正院流音^{こうしょういん}である。

たまに、こうして天体観測に来る……のだが、少々今日は運が悪かったようだ。

天体観測中の流音の背後に人影が近付いてくる。

天体観測に夢中の流音はそんなことに気付きもしない。そして人影は後ろから流音の口元に、薬品を染み込ませたハンカチを当てた。

「んッ………！」

そして流音は……眠りに落ちる。

烏丸山の空は、相変わらず澄んでいた。

……カンカンカン

「朝ですよーごはんですよー」

フライパンをオタマで叩きながら、ご主人様の部屋の前を歩く僕。

…カンカンカンカン

「お・き・ろッ!!・お・き・ろッ!!・さっさと・起きろ!!」
畜生……こうなったら昔いた騒音おばさんにでもなってやる。

「うるさいでっす!!」

ハエたたきを取りだし、振り回すミカンちゃん。

ヤベッ!!・トイレ臭いッ!!

「ユウさあん、出来ました!!・玉子焼き……きやああ!!」

キッチンから藍さんの声と爆発音。ってか、なんで玉子焼きで、爆発音がするの? 爆竹入りですか?

ちなみに藍さんは、珍しく早起きしていて、暇そうだったから朝食の手伝いをさせている。

けど……僕の場合は180。間違ってた。

「バター4番!!・さかきね榊嶺ライ!!・ピッチャーに向かって討ちました

ああああ!!・カキーン!!」

ばっこおおおん

と、高級そうなライさんの部屋のドアが破壊される。

……

……ライさん

……寝相凄すぎ

……普通、バット振り回さないから

……しかも……討つの漢字間違ってるし……

……どんだけ相手を叩きのめしたいの?

「ナーナーナナーナナーナナー」

今度は伽凜さんの部屋から軽快な音楽が聞える。

……ついでに伽凜さんの歌声も……

……ボタン、とドアを開けると……

「アゲアゲ!!・アゲアゲ!!・おっぱいのサイズもアゲアゲ!」

……

……オイ……

……テメェ朝っぱらから上半身裸かよ!!

しかも、去年の紅白の録画をテレビで流してる。エンドレスで…。

「グッモーニン！ 使用人！ アゲアゲ！！ おっぱいアゲアゲ！！」
母上……私は人間界に来たことを後悔しています。

「伽凜！！ ペチャパイのくせに、何やってるでっすか？」

「おっぱい大つきする呪文を唱えてるんや！ ハイ！ アゲアゲ！！」
どうやら一晩中、踊り狂っていたらしく、顔はもうアダ○スファ
ミリーになっちゃってる。

ヤバイ

別の意味で呪われそう…。

「んもう！！ うるさいんだけど！ あたしの快夢を妨げて！！ あと少しで蛭責めできたのに！！」

……風花さんも朝から非常に刺激的な夢を見るもんだ……。

「風花あ！！ おっぱいどうしたら大きくなるでっすか！？」

「は？ ふふ……それはね、おっぱいを揉めば大きく……」

「ちよっと！！ ミカンちゃん中学生なんですから！ ナニ教えこんで
るんですか！！」

もう一度言うが、今は朝だ。

なんでこの人達テンション高いの？

溜め息をつくとき、キッチンからまたもや爆発音……。 藍さん……

絶対料理をしてないよなあ

食材で兵器作ってるよ。

「皆さん、おはようございます」

「あ、桜子さん、おはようございます」

この屋敷の中で、唯一まともな人。ああ、名前の通りに桜子さんの
後ろに桜が舞っているようだ。

「朝から大変ですね。ミカンさんと伽凜さんを手なづけるのは一苦
労ですから。」

いや、桜子さん。間違ってるよ。一苦労じゃない。百苦労だ。

「なんだかんだ言って、もう半年ですね。時間が過ぎるのは早いも

のです……」

「……ははは……なんか僕、長年ココに暮らしていた様な錯覚に陥りますよ」

そうだ……僕はココに来てから、トラブルにしか巻き込まれていない。

下着ドロボウ扱いされて、幽霊に体のつとられて、散々仕事を押し付けられて……ああッ……僕ってなんだろう？

トラブルの無い日なんて無い……どうせ今日も何かあるさ……ハッハッハ

「何やってんのよ？伽凜の部屋で……」

ミルクさんだ。今起きたばかりらしく、頭は寝癖で某有名妖怪アニメ、砂〇けババアのようなうだ。

「大豆おっぱいが来たで」

「ペツチャンコでっす!!」

「揉んであげよっか？ミルクウ？」

そう言いながら歩み寄る風花さんを、ミルクさんはハリセンで頭を叩く。

ってか、ハリセンって古くね？

「そんな馬鹿話どうでもいいわよ。ところで流音しらない？朝からいないんだけど」

……そう言えば、昨日流音ちゃんは天体観測をしに烏丸山へ行った……いや、まさかな……ナイナイ……有り得ない。

最近は何騒だけど……いや、有り得ないって……でも、たしか流音ちゃんの実家は超大富豪の財閥……誘拐？いや……無いって……。

……。

「誘拐って……有り得ませんよねえ？ははは」
苦笑いしながら言う僕。

「「「「「いや、まさかあ」「」「」「」

と、7人のご主人様は同じような苦笑いをする。

……連絡もないし

……事故とかのニュースもないから……。

……もしかして……誘拐されちゃった？

第22話〈金持ちとパンダ〉（前書き）

すいません！！久々更新でっす

第22話〈金持ちとパンダ〉

「……………」

怪しい男達に無理矢理眠らされた光正院流音は、静かに目をさます。

自分の体に目を向けると、麻の縄で椅子ごと縛られていた。

壁には無数の本がしまっており、自分の正面には大きな机がある。カーテンや床は豪華なデザインが施されていて、この家？の主は相当な金持ちだと思われる。

「ここ……………どこ？」

必要最低限の言葉を使った質問。しかし、誰もいないこの部屋から返事はない。

すると、自分の後ろ側にあるドアが開いた。

「あら？お目覚め？残念ですわ」

カツカツと歩き、流音を無視して机の椅子に座る。

「わたくし、高井田華子と言いますの」

「……………高い鼻穴？」

チゲエよボケ。アホか。

華子は咳払いをし、流音に指をさす。

「わたくしは元・光正院家の者ですの。貴方のおうち、随分金が多入ったようですわね。わたくしを追い出し、金ばかり欲しがって……………！」

「アンタの顔ブスだから追い出されたかも……………」

オイイイイ！！女性にブスはダメだよおお！！

一応補足するけど華子はめっちゃ美人。というか高貴な女性だ。

「貴方、あとで見てなさい。酷い目にあいましてよ。」

先程の言葉がカンに触っていて、華子は血管を額に浮かべたまま部屋を出ていった。

場面は変わって屋敷のリビング……

「吐け！！お前が流音を拉致ったんやろ！？」

「ち、違いますよう！！私、皆と一緒にだったじゃないですかあゝ！」

「ま、アンタもいろいろあるでっすからねエ。カツ丼食べまっすか？」

「伽凜さんもミカンさんもオゝ！私何もしてませんってエ！！うわあああん」

……こちらは藍さんが無実の罪で、バカ2人の刑事ごっこに付き合わされている……。

「不思議っ子流音を拐ったヤツはドコにいるのオゝ？うふふふふゝゝどうしてやろうかしらアゝゝ。木馬を用意してエゝうふふふふゝ裸にさせてエゝゝ風花の奴隷にさせてエゝゝ」

……こいつは頭がラリっている……。多分、末期だと思う。

「オホホホ。明るいですわねえ、私達の家族は」

んなことどうでも良いですからッ！逆に今明るのがウザイですよ！

「……はあゝ。何でウチってこうなんでしょうねえ……一応、非常事態ですよ？非常事態……」

僕たちは会議室で対策会を開いているのだが、……意味無い。ってか泣きたい。

「つか、誘拐なら電話かかってくるよな」

「身代金よね？流音の実家、超金持ちだから、それ狙っているんじゃない？」

珍しくライさんとミルクさんが真面目に会議。

でも流音ちゃんが消えてから、かなり時間が経っている。

「流音に何したんやああ！？？大人の階段上らせたんかああああ！！？」

「藍イイイ！！実はムツツリスケベでっすねエ！？だから流音を……！！！」

「ああもう!! うるさいですよ!! 流音ちゃんが事件に巻き込まれてい……」

ピンポーン ピンポーン

「すいませえん。郵便です。うひょっ」

……………なんだ

「うひょっ」 ってのは。

行きたくないけど、行かねば……………。もしかしたら犯人からの連絡かもしれない。

重い腰を持ち上げ、僕は玄関に行った。

「はい、いつもご苦労様で……………げっ!!」

「…うひょっうひょっパンツ好きかい？」

僕の目の前にいたのは、パンダのマスクを被った変態野郎だった。

第23話く牛乳と片栗粉く（前書き）

かなり遅れた更新です；待たせて、すみませんでした；；感想もら
えたら、アサゴロモに、ネタの神様が降りてきます##（マジです
w

第23話く牛乳と片栗粉く

「……………」

僕は今、自分の目を疑っている。

「うひょっ」

郵便を届けに来た従業員が、変態パンダだということを…。

「うひょっ！ 久しぶりだねく女の子たちも元気になっているかい？ パンツの匂いまた吸い込みたいなあくあ！ 勤務中なのにゴメンね。はい、手紙」

嗚呼…………前が涙で霞んで見えないよ。ナニ？ この人。何なの？

「じゃ、ボクは帰るよ！ 今、郵便局でアルバイトしてるんだもうすぐ民営化だからね」

バイバイくと言が残し、去ってゆく変態パンダ。

僕は半分ぐずりながら手紙を受取り、中身を見ると、一枚の紙が入っていた。

「…………ん？」

その紙を開くと一文字一文字、新聞紙の文字を切り抜いて作った文章だった。『お前の家族は預かった。返して欲しくば、身代金1億円を用意しろ。』

…………ベタだなあ

この世にまだこんなベタな人がいるとは思わなかった。

名〇偵コ〇ンくらしいの犯人だけじゃないだろうか？ しかも身代金用意しろって書いてるだけで、場所や時間を記していない。馬鹿だ。きっとこの犯人は馬鹿に違いはない。

僕は重い足を動かし、みんなが朝食をとってる食堂で、に向かう。
ガチャガチャ…ビチャビチャツ……………ん？
何？ この音

パッキーン、バリバリ、ブリッ

おい：最後のブリッてなんだ？なにしたんだ？
食堂に恐る恐る入る。

「牛乳ビーム！！！！あたしの乳ミルクウー！」

「ふえあーッ！や、やめて下さいー！白い液体気持ち悪いですよ
」

「牛乳に片栗粉とか混ぜてドロドロにしたらエロいでっすよ！」

「ぎやはははは！みかん！変な言葉使わんというて！藍の変な姿、想像してまうー」

「ちよっ！風花！藍が大変なことになってるじゃない！！」

「服濡れて下着透けてるし……って、おい！俺に牛乳かけるな！！」

「ちよっと！やめなさいよ！！朝ごはんできないじゃない！！」

「ミルクさん、味噌汁………というか、具なし味噌汁沸騰してますよ？」

「とりやあ！！片栗粉入りの乳ミルクープラス、マヨネーズもおみまいだアー」

「ふあ！やッ！！ヌルヌルしてッ……あッ……気持ち悪いですよ
」

「萌えるわー！世の中の男性諸君が釘付けになるぞ？ホンマ」

「オメーら食べ物を大切にしろッ！！いいか？このお前らが遊んでる牛乳だってな、農家の方が……」

「ライ、覚悟でっすー牛乳攻撃ー」

「……いい加減にしろコラあああああああ！！」

「きゃあ！ラ、ライ！！バット振り回さないで！！！！」

「皆さん食べ物を大切にしないと、私もキレますよ？ホホホ」

……

……

………帰りたい。………故郷に、帰りたい。そして………

………牛乳くさい………

第24話〈ロケットと花火〉

「……………ここですね」

「ここですす！」

「間違いないんとちゃう？」

僕たちは今、とある大豪邸の門の前に立っている。……………もちろん朝食を”きちんと”とってから。

「ってか、普通、誘拐犯が潜む住所なんて自ら手紙の裏に書かねーけどな」

「単なる馬鹿じゃない」

「どうしようもない馬鹿ですわ」

そう……あの馬鹿げた犯行文の裏に、きちんと犯人のアジトだと思われる住所が書かれてあったのだ。しかも達筆だった…。

ためしに住所の通りに行ってみたら、この大豪邸に着いたわけだ。自分の身長の上倍以上はある門の向こうには、美しく手入れされた庭が広がる。中心に噴水があり、薔薇の花のアーチをくぐると、この豪邸に入れるらしい。

「ってゆうか、まだ牛乳くさいですよー風花さん、どうしてくれるんですかあー」

「うるっさいなーまた牛乳かけるよ？」

「ふえッ」

首をすぼめる藍さん。その反応が気に入ったらしく、風花さんは次々と言葉で藍さんをいじめる。

「藍の牛乳プレイ、萌えだったよーオホホホホ。結構エロかったしねー」

「なななな、や、ヤメテ下さいー」

あーあ……また始まったよ、言葉責め……。さっき、とうとう藍さ

んがキレて食堂半壊したのに…またキレちゃうじゃん。というか、風花さんの精神を半壊してほしい。

「ハイハイ、喧嘩止めて下さいよ…流音ちゃんを助けないと!」

「次は牛のミルクじゃなくて、ユウのミルクをかけるよ…」

「えッ!!? ちょっ! まっ!! ナニ言ってるんですか!!?! 止めて下さい!!!」

「ぜぜぜ、絶対嫌ですよ…うわああん」

「え!?!? なんか……えッ!?!? なんで、そんな必死に拒否するんですか!! 完全否定ですか!?! い、いや!!! そういう意味じゃなくて……! 違うんですッて! つか、なんでみかんちゃんと伽凜さん、素でひいてるの!!!」

そんな僕の叫びをみんなが白い目で見ているとき、門の右側に設置されているモニターに電源が入った。

ブッ———……

『こんにちは皆様。ご機嫌うるわしゅう』

画面には綺麗な女の人が写っていた。女の人は優しく微笑むのだが、毎回恒例の下ネタトークを止める事はできない。

「ホンマにひくわ、ユウ。どうせ牛乳プレイ見てる時から、下半身ロケットになってたんとちゃう?」

伽凜さんに完全無視されているのだが、諦めずに一方的な会話を続ける。

『よくここまで来たわね、誉めてあげますわ。』

「ロケットに、危なく火がつくところだったんじゃないですか? 火花パーンでっすよ。そして藍に届くように火花を飛ばすんでっすね?」

オイテメエ、ふざけんな。ギリギリトークじゃねえか。

『私、高井田華子と申しますわ。ホホホホ、貴女方の大切な家族は……』

「穴には棒をいれなきゃなんないしね。ズコズコと…。ウフッ…アハハハ」

『ちよつと!!聞してるの?!貴方達!!』

ベタなタイミングでツツこむ 女の人、改、高井田華子。うん。
僕はちゃんと聞いてたよ。

聞いてないのは、口から悪口と下ネタしか発せない馬鹿だけです。

第25話〈怪力とM〉

高井田華子の怒りも無視し、会話？というか、軽いイジメを続ける3人の常人と3人の馬鹿と1人のいじめられっ子。

「ユウのミルクを受け止めるでっす！藍！」

「……ちよ、ヤメロよ、藍がまた暴れるかしんねーぞ？」

「藍、意外とテクニシャンそうやもんな！ユウもヘヴンに行けるんとちゃう？ギャハハハハ」

「藍もう泣きそうじゃない……絶対暴れるに決まってるわよ……」

「藍はMなんだからユウに調教されてもいいじゃない？藍が使用者でユウがご主人様とかアハハハハ」

「藍さん震えてますわ。私、少し離れてますわね」

桜子さんと、ミルクさん、ライさんが藍さんから離れた瞬間、藍さんは大声で泣き出した。

「ひっ……うっ……うえっ……うわああああああああああああああああああああああん……！！」

メキメキメキッ

藍さんは門をひねり外し、両手で持ち上げた。

「うわっ！ちよ、ゴメン藍！！本気じゃないからッ！！」

そして、僕の方がけて門を投げ……あれ？僕何もしてなくね？「私えっちじゃないですうううああああああああああ！！！」

「う、うわああああああああああ！！！」

門が僕の方へぶっ飛んでくる。避けようも避けられない。頭を手で覆い、目を固くつぶる。

どがしやああああああん

「……………う…あれ？」

痛みが来ない。どうしたんだ？

目を恐る恐る開けると、門は僕の数センチ左に落ちていた。……

……………あつぶねエ。

「ううっだって、皆さんが悪いんですよ？うっ…私をイジメて…うっ…」

沈黙の中、藍さんはしくしくと泣く。風花さんは、藍さんを怒らせた主犯のくせに、腰が抜けて立てないようだ。

「あ、そういえばモニターは？」 モニターを見ると、見事に門の破片が突き刺さり、修復不能の状態になっている。

「何よ、モニター壊れたじゃない。使えないわねエ」

と、とことこ門が無くなった豪邸に入るミルクさん。

「何だよ、結構あの高井田華子だかつつうババアの話ベタで面白かったのに」

ライさんもミルクさんに続いて入る。…ってゆうか、あれ？

「ババアじゃありませんわ。まだ若そうじゃありませんか。」

この人たち…

「女は三十路過ぎたらババアでっす」

「ミカン、世の中の三十路を敵にしたらアカンて」

「ホラッ！！早く歩きなさい！！ドM！！！！」

「風花さあん！私Mじゃないですよぉ〜」

モニターわざとシカトしてた？

……………なんかもう、帰ってえなア

豪邸の中に入ると、まるで城のようだった。

赤い絨毯がしかれ、絵画やオブジェが飾ってある。

「すごいですね、ここ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0029b/>

僕は使用人♪～8人の少女編～

2010年10月17日15時50分発行